

日本醫史學雜誌

第 16 卷 第 1 号

昭和 45 年 4 月 30 日発行

第71回日本医史学会総会（昭和45年6月6・7日 千葉市）

——特別講演——

近代日本における外人宣教医の研究……………長門谷洋治…(1)

ススルタ・サムヒータを訳して……………鈴木 正夫…(45)

——会長講演——

糖尿病による視力障害についての史的考察

並びに李東垣の処方について……………鈴木 宜民…(49)

——一般演題——

通 卷 第 1379 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2～1～1

順天堂大学医学部医史学研究室内

振替口座・東京15250番

電話 (813) 3111 内線 544

1日600mgの時代です!

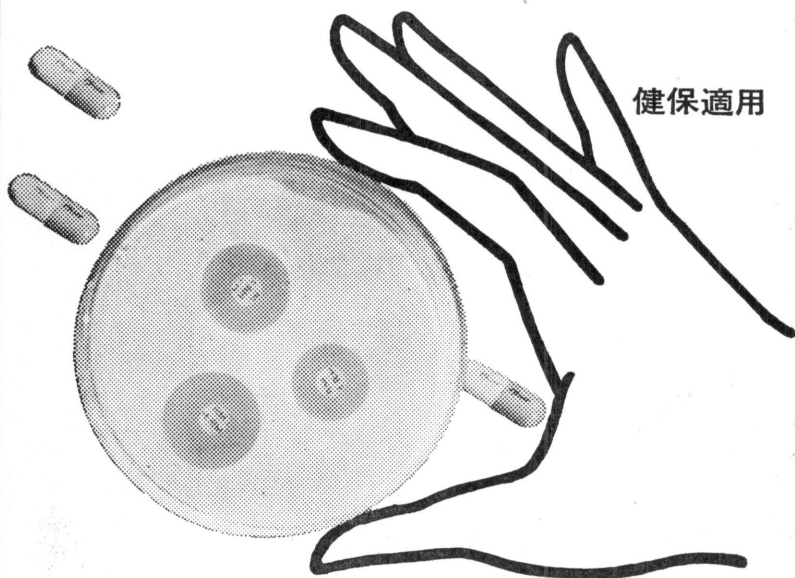
従来のテトラサイクリンに広さと深みが変わりました

広範囲抗生物質

Methacycline hydrochloride

ロンドマイシン カプセル

- 呼吸器感染症、消化器感染症などに優れた治療効果が得られる
- 1日600mg 2分服で有効、吸収が速かで高血中濃度が長時間持続する
- 胃腸障害が少なく、光線過敏症も報告されていない
- 健保薬価：1カプセル ￥57.00



* 科学は世界の向上のために—医学は人間の幸せのために



台糖ファイザー株式会社

東京都中央区日本橋通2の2 TEL (272) 6661

目

次

特別講演

第七一回日本医史
学会総会演題

「千金要方」の研究（第一報）

明治初期漢洋脚氣病院設立の裏面史について

帆足万里の「医学啓蒙」について

ボンベ・ファン・メールデルフォールトの脚氣論並びに麻疹説

岡山地方の種痘と適塾門人 守屋庸庵

ベルツと日本学校衛生

フィシスと陰陽

藤井方亭に関する研究、特に諏訪俊に関する新資料について

パラメディカル教育史の一面、明治初期の看護婦教育

コス島の国際ヒボクラテス財団の現状

外科手術無菌法の開拓者テリヨン

坪井信道の日習堂塾平面図

加賀藩の人体解剖学模型

『眼科新書』中の眼科略図をめぐって

大塚恭男 51

矢数道明 51

小川鼎三 52

大滝紀雄 53

中山 沃・石田 純郎 53

杉浦守邦 54

三木 栄 55

津田進三 56

柴田幸雄 57

蒲原 宏 58

古川 明 58

青木 一郎・中野 操 59

酒井 恒 59

片桐一男 60

蝦夷地異疾考と壞血病……………	松木明知	60
比較語学的方法による身体意識史検討の試み (2) ……	三輪卓爾	61
明治時代の鉦夫共済組合病院……………	三浦豊彦	61
愛知県病院教師ヨングハウスについて……………	中野操	62
アグノーの著書について……………	大矢全節	62
酒湯 (ささゆ) の行事記録からみた阿波藩主 (蜂須賀家) とその家族の疫史的考察……………	福島義一	63
江戸時代の精神病学における一本堂……………	山田光胤	64
医学教育史について……………	阿知波五郎	64
「蘭学事始」への大槻玄沢の寄与……………	緒方富雄	65
西域医業の東漸史について……………	吉田一郎	66
室町戦国時代における曲直瀬道三の史料考証……………	今市正義	66
享保十五年の製剤記録……………	赤松金芳	67
川本草民の化学書についての「考察」……………	宗田一	68
「陶斎雜録」(河口信順)……………	川島恂二	68
仏像・仏画におけるの Babinski の足ゆび現象……………	豊倉康夫	69
小森桃塲著「蘭方枢機」について……………	大鳥蘭三郎	69
「温室経疏」にみられる医学思想……………	杉田暉道	70
銅人と石経……………	石原明	71
大槻玄沢の産科書について……………	酒井シヅ	72
ギプス包帯技術の日本への輸入について……………	蒲原宏	72
明治前における北海道、青森の狂犬病史……………	松木明知	73

特別講演 (I)

近代日本における外人宣教医の研究

長門谷 洋治

Studies on Activities of Missionary Foreign
Physicians in Modern Japan

YOJI NAGATOYA

目次

はじめに

1 宣教医について

2 先人の業績

3 史的背景

一、ルイス・デ・アルメイダ

二、インド、ビルマ、シヤム

三、中国

四、モリソン号渡来とバーカー

五、ベッテルハイムの沖繩伝道

六、マックゴワンの来日

七、まとめ

4 来日宣教医一覧

5 統計的観察と考察

6 個人伝

一、初期来日宣教医

二、アメリカン・ボード

三、米国監督教会

四、莫・加よりの来日宣教医

五、その他

7 宣教医の行なった医療

一、その特性

二、ヘボンとフオールズの場合

三、ベリーの著二点

四、同志社病院英文年報にみる疾病統計

五、テイラーの疾病統計

おわりに

文献

はじめに

わが国は明治以降、ドイツ医学をその範にとつたが、それ以前の幕末から明治初期にかけて英米系医学の影響の強いことがあったことが知られている。その一は一八六一年来日し、英国公使館つきの医師として、わが国にも大きな貢献のあった William Willis をはじめとする来日英人医師の活動であり、その二は、阿知波五郎氏の研究により明らかのように明治十年前後に多数翻訳された英米系医学書の影響である。(1)

『そして第三としてやはり幕末から明治初期にかけて来日した宣教医のわが国医学に及ぼしたところも決して少なくない』と考える。宣教医のほとんどは英米人、なかんずく米人であった。彼らは医学、医療のみでなく文化面における功績も大であった。

筆者は年来、医学史の立場から宣教医の研究にとり組んできたが、今回はその対象を開国から明治末年までに来日した新教外人宣教医に限定し、いささかの考察を試みたい。これはなお研究途上にあるものであり、かつ本稿では神学的な面からの考察についてはこれを行なうていず、不備な点が多いがさらに今後に待ちたいと考える。

1 宣教医について

宣教医とは Medical Missionary の訳語である。明治初期には法教医とよばれたこともある。また伝道医、伝道医師などとしていられることもある。ミッシヨナリー・ドクターという表現もあるが、欧文献ではあまり用いられていないようである。

宣教医の厳格な定義は難しい。竹中勝男氏(2)は「宣教師にして同時に医師の資格を有し医療に従事した人」としている。筆者は「医療伝道 Medical Mission を行なう医師」と解したいが、本稿ではその幅をかなり広くとって、宣教師ではないが、教団経営の病院に勤めていた医師などを含めた。

宣教医の主たる目的が宣教にあることはいうまでもなく、医療はいわばその手段であるが、実際には宣教と医療を別々に行なうのではなく、両者が混然一体となっているものである。

原則として宣教医は教団（ミッション）に所属し、教団より給与を受けるのであるが、例外として一定の教団に属さず、従って給与も受けない独立 Independent（給与を受けず自力で宣教を行なうものを自給 Self-Supporting という）の者がある。医師とは申すまでもなく、医学教育を受けて、医師免許をもった者である。従って正式な宣教医はつぎのように記される。

Rev. Arthur H. Adams, M. D.

Rev. は Reverend の略である。しかし単に

Dr. Arthur H. Adams

と記されることも多い。（3）

宣教医は時代、国、宗教の区別なく存在し得るが、本稿では首題により、わが国の開国から明治末年までの、キリスト教の来日外人宣教医に限って話を進めたい。

2 先人の業績

宣教医に関する研究は従前より主としてキリスト教史の立場から行なわれたものが多く、医学史の側からは一部の個人伝を除いて、あまり活発には行なわれていない。その中において故佐伯理一郎氏（1862～1953）は、『自从来日宣教医の多くに直接接し、貴重な史料も多数保存しておられた。氏には『幕末及明治におけるアメリカ医師の活動について』（一九五〇年）（4）なる論文があり、これは来日宣教医四名の伝記よりなっている。本稿も旧佐伯蔵の史料に負うところは大きい。

わが国においてもっともまとまった宣教医に関する記述としては竹中勝男氏の『本邦近世社会事業の先駆者としての宣

教医』(一九三七町)(2)がある。これは表題のごとく社会事業史の立場から宣教医について研究されたものであるが、主として十二人の宣教医の伝記よりなっている。なお、宣教医のみを扱ったものではないが、やはり社会事業史の観点から宣教医について述べたものに生江孝之氏の『日本基督教社会事業史』(一九三一年)(5)がある。

外人による発表はまず自身が宣教医であった J. C. Berry が Japan Evangelist (一九〇五)に "I was sick and ye visited me" と題して記したものを Frank Cary が注釈をつけて抄出した(一九五九)(6)ものがあり(重久篤太郎氏の指示による)内容は数人の宣教医の伝記である。また A. A. Bennett の Medical Mission Work (一九〇七)(7) S. Heaslett の Christian Medical Work in Japan (一九一七)(8)はともにわが国の医療伝道について記したものである。

後述の W. N. Whitney の "Notes on the History of Medical Progress" (一八八四)(9)の中にも Medical Missions と題した章がある。

3 史的 背景

本題にはいる前に、わが国における新教伝来以前、すなわちキリシタンの医療伝道について簡単にみるとともに、東洋諸国、ことに中国における新教の医療伝道の状況について述べ、さらにわが国に最初の新教宣教医が来着する前の琉球を含めた当時の情勢についてみてみたい。

一、ルイス・デ・アルメイダ

わが国にキリスト教の招来されたのは周知のように一五四九年であるが、それから三年後の一五五二年に有名なポルトガル人、ルイス・デ・アルメイダ Luis de Almeida (1525? ~ 1584) の来日をみている。彼は商人の出であり来日後宣教師となったが医術ことに外科の知識を有していた関係で、その方面で著明な活躍をなし、一五五七年には豊後の府内(現在の大分)でわが国初めての洋式病院を設け、翌年より医学教育を始めている。しかし彼の属するイエズス会は一五五八年、会士の医学教育、医療を禁じ、そのことが一五六〇年わが国にも達したので、彼はこれから離れ伝道のみに従事す

ることとなった。以上よりアルメイダをキリスト教の来日宣教医の最初ということができると思うが、彼以後にも幾人かの各会派の医療伝道従事者が来日し、各地に病院を開き、ことに救ライ事業に見るべき功績がある。

一五八七年、豊臣秀吉のキリスト教布教禁止、一六三五年、幕布による鎖国令などにより、キリスト教の医療伝道は衰退を余儀なくされたが、南蛮外科で代表されるいわゆる南蛮医学は完全に消滅することではなく、その後のオランダ医学へ受け継がれることになった。(10)

二 インド、ビルマ、シャム

インドにおいては英国より一七八三年、船医であった John Thomas が来たのに初まり、彼の一七九二年の帰英のあと、宣教師 Carey が翌年に来り、一八〇一年死亡。しばらく空白のち一八三八年に Archibald Ramsay が来、一八五二年にはロンドン宣教協会 London Missionary Society が Leitch を送った。

この間、アメリカよりはアメリカン・ボードより一八二〇年に John Scudder を送り、一八五二年には同ボードより Greene が派遣された。(11)(12)

ビルマでは一八二四年第一次ビルマ戦争がおこるが、そのとき宣教医 Price が捕えられている。彼がいつビルマに来たのかは不明である。(13)

シャム王国には一八三五年に Dan Beach Bradley が宣教医として来、一八三六年には最初の一年余の期間の医療事業報告を行なっている。(31)

三、中 国

中国における新教外人宣教医の最初はアメリカン・ボードより一八三四年来任した Peter Parker である。彼はその翌年に広東に広東眼科医院を開いた。これより先一八二七年に東インド会社の英人医官 Thomas Richardson Colledge は澳門に眼科医院を開いて医療伝道に従事した。(彼は教団よりの派遣でないので、厳密には宣教医としない)一八三八年に彼らは広東に Medical Missionary Society in China を創立し Colledge が初代の会長となった。

中国への一般宣教師の来着の最初は一八〇七年、ロンドン宣教師協会よりの Robert Morrison であるが、彼の招きで一八三八年同会より医師 William Lockhart が赴任している。翌年ちやうに上海に同会より Benjamin Hobson 合信が来着している。

一八五五年 Parker がアメリカ公使になったあとを J. G. Kerr が来任。それより先一八四三年にはアメリカ・バプテスト教会の Daniel Jerome Macgowan (後述) が、翌年にはのちに来日する米国長老教会の Divie Bethune McCarlee がともに寧波(ニンポー)に来ている。

一八四二年厦門(アモイ)に米国監督教会の W. S. Boone が、翌年には後述の James Curtis Hepburn が米国長老教会より派遣されている。一八五四年には英国の中国伝道協会 Chinese Evangelisation Society から派遣の James Hudson Taylor が上海に来着、のち彼は寧波に移っている。(11)(12)(14)(15)これら中国渡来の宣教師のうちカーとホブソンには多数の著述があるが、カーのものは「皮膚新論」「内科闡微」の二点しかわが国に紹介されなかったのに対し、ホブソン(合信1816~1873)の著述では「全体新論」、「博物新編」、「西医略論」、「婦嬰新説」、「内科新説」などいづれもわが国で翻刻され、とくに「西医略論」「婦嬰新説」はもっとも広く行なわれた。また「全体新論」にはキリスト教思想がもたれており、(16)特異なルート、方法による医療伝道といえよう。

四、モリソン号渡来とパーカー

一八三七年(天保八年)、漂着日本人をのせたモリソン号が浦賀に入港したが、浦賀奉行はこれを砲撃して上陸はならなかった。この船の乗員の中に前述の宣教師パーカー Peter Parker (1804~1888) がいたことは注目され、もし彼が上陸していたら西洋医学が新たなルートで移入されていたことになる。モリソン号は訪日の途次、沖繩にも寄港している。(17)ところでパーカーはその後もう一度わが国と関係をもつに至る。すなわち一八七四年十月九日、新島襄がアメリカ、バーモント州、ラトランドにおけるアメリカ伝道協会海外伝道部第六五回年会にて演説、そのさい学校(同志社)設立について賛助を求めたところ、それにまず応じたのがパーカーであった。このことについて新島は『同志社設立始末』(一八八八)

の中でつぎのように述べている。「語未だ尽きざるに聴衆中忽ち人あり。背後に直立して揚言すらく。新島氏よ、予今君が設立せんとする学校のために一、〇〇〇ドルを寄付すべしと。是なん華盛頓府の貴伸医学博士バーカ氏にありし」。新島はのち一八八五年に改めてアメリカを訪うたときにもワシントンで彼に会っている。(18)

五、ベッテルハイムの沖繩伝道

一八四六年、英国の宣教医ベッテルハイム Bernard John Bettelheim (1811~1870) がロンドンの琉球海軍伝道会 Loochoo Naval Mission より派遣されて那覇に到着。護国寺に居を構え医療伝道に従事した。当時沖繩でもキリスト教の布教は許されていなかったで、主として聖書の琉球語訳などに力を入れざるをえなかったが、一八四六年から四七年の間に医師仲地紀仁に牛痘接種法を伝授している。(17)(19)彼は一八五四年同地を離れ、ペリーの率いるアメリカ艦隊に便乗し、上海を経てアメリカに渡航した。当時の沖繩の統治権は正式にわが国のものではなかったから、彼をもって直ちに来日宣教医の第一号とすることはできない。従前の論考も彼を来日宣教医とはみていない。

六、マックゴワンの来日

一八五九年一月、中国在留であったアメリカ・バプテスト教会の宣教医マックゴワン Daniel Jerome Macgowan (1814~1893) が帰米の途次、長崎に寄り、数名の日本人青年に英語を教え英漢対訳の新訳聖書の写しを与えた。しかし当時はまだキリスト教は禁じられていたので、彼らは後難を恐れて聖書の写しは返戻した。(20)

もしマックゴワンがわが国に上陸していたならば彼が来日宣教医の第一号ということになるが、彼が上陸したという確証は得られない。おそらく船中で教え、日本人が船に通ったものと思われる。

七、まとめ

以上によりみるに、わが国にはすでに十六世紀にキリスト教が伝来し、医療伝道も活発に行なわれたが、その後本国伝道会の方針とわが国の鎖国政策などにより、少なくとも表面的な活動はみられなくなった。十九世紀に入って欧米の東洋進出はようやく盛んとなり、その接触の方法として医療または教育を行なう宣教師を送りこむことが活発に行なわれ、こ

とにインド、中国などでは優れた宣教医の活動がみられた。わが国は一八五四年、日米和親条約を締結調印、下田、箱館二港を開き、五八年には日米修好通商条約に調印、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとも修好通商条約に調印。五九年には神奈川、長崎、箱館を開港。そして五七年には長崎に幕布の招聘により蘭医 Pompe van Meerdervoort が来着し、五八年には全面的に蘭方禁止令が解かれ、江戸の蘭方医八十余名が、お玉が池に種痘所を設置するなど、医学における西洋化の傾向はすでに明瞭であった。

一方わが国は開国したもののキリスト教の布教はこれを許さず、キリスト教禁制の高札が撤廃されたのはかなりののちの七三年のことである。従って初期の来日宣師は教育とか医療などに力を入れざるをえない必然的な理由があった。なお地理的な関係もあって初期には中国在留宣教医の影響が大きい。

第1表 来日宣教医一覧(安政6年—明治45年、来日年度順)

姓 名 生年—没年	国	来日年—離日年 (死亡年)	所屬ミッ ション	出身学校 (医学関係のみ)	夫妻同 伴の有 無	主たる仕事、 従事場所	歴 任 地	備 考
1 James Curtis Hepburn 1815～1911	米	1859(安政6)～ 1892	PN	ペンシルバニア 大学医学部	+	医療、和英辞書 編纂、聖書翻訳 明治学院	横浜、東京	
2 Duane B. Simmons 1834～1889	米	1859(安政6)～ 1889+	RCA		+	十全病院、東大	横浜、東京	
3 H. Ernest Schmid ?	米	1860(万延元)～ 1861	PE				長崎	
4 Divie Bethune Mc Cartee 1820～1900	米	1861(文久元)～ 1900	PN	ペンシルバニア 大学医学部	+	開成学校、明治 学院、東京外語	東京	
5 John Cutting Berry 1847～1936	米	1872(明治5)～ 1893	ABCFM	シエラレーン ン 医大	+	恵濟院(神戸)、岡 山県立病院、同志 社病院、監獄改良	兵庫、岡山、 京都	
6 Marquis Lafayette Gordon 1843～1900	米	1872(明治5)～ 1899	ABCFM	ロングアイラン ド カレシ病院	+	同志社	大阪、京都	

7	Henry Laning 1843~1917	米	1873(明治6)~ 1915	PE	ミシガン大学医 学部	+	聖バルナバ病院 明治医学校	大阪	
8	Davidson Macdonald 1836~1905	加	1873(明治6)~ 1904	UCC	トロント大学医 学部	+	静岡病院 新潟女学校	横浜, 静岡, 新潟, 東京	
9	Arthur H. Adams 1847~1879	米	1874(明治7)~ 1878	ABCFM	エール医大	+	松村診療所, 長 春病院	大阪	
10	Henry Faulds 1843~1930	英	1874(明治7)~ 1882	UPS	アンダーソン大 学	+	築地病院, 指紋 学, 盲人救護	東京	
11	Theobald Adrian Palm 1848?~1928	英	1874(明治7)~ 1883	Edinburgh Medical	エジンバラ大学 医学部	+	バーム病院	新潟	73年来日 とするもの あり
12	Wallace Taylor 1835~1923	米	1874(明治7)~ 1912	ABCFM	ミシガン大学医 学部	+	岡山病院, 同志 社, 長春病院	岡山, 京都, 大阪, 神戸	
13	Luther Halsey Gulick 1828~1891	米	1875(明治8)~ 1881	ABS		+		横浜	
14	Willis Norton Whitney 1855~1918	米	1875(明治8)~ 1911	IND	ペンシルバニア 大学医学部	+	赤坂病院	東京, 金沢	
15	Fredrick Kreckler 1843~1883	米	1876(明治9)~ 1883+	EA	ジェファーソン 医大	+	聖書翻訳	東京	
16	Alexander Durham Hail 1844~1923	米	1878(明治11)~ 1923+	CPM	クリーブランド 医大	+	ウイルミナ女学 校	大阪, 和歌 山	
17	F. E. Porter (Mrs.)	米	1882(明治15)~	PN		+	英和幼稚園	金沢, 京都	
18	Florence Nightingale Hamisfar (Miss)	米	1883(明治16)~	MEFB			第二高等学校	函館	
19	Frank W. Harrell ?~1904	米	1884(明治17)~ 1887	PE				東京, 仙台	

20	Herbert W. Schwartz 1857~1921	米	1884(明治17)~ 1916	MEFB	シラクサ大学医 学部	+	東奥義塾	仙台, 東京, 弘前, 松本	
21	Doremus Scudder	米	1885(明治18)~ 1889	ABCFM	シカゴ医大		新潟英語学校 (北越学院)	新潟	
22	Sara Craing Buckley (Mrs.)	米	1886(明治19)~ 1892	ABCFM	ミシガン大学医 学部	+	同志社病院	京都	
23	Oskar A. Dukes 1854~1930	米	1886(明治19)~ 1930+	MES	ヴァンダビルト 大学	+	関西学院	神戸, 大阪, 松山	
24	Walter Russel Lambuth 1854~1921	米	1886(明治19)~ 1921+	MES	ヴァンダビルト 大学	+	関西学院	広島, 神戸	
25	W. S. Worden	米	1886(明治19)~	MEFB		+	遺愛女学校		
26	Samuel H. Wainright 1863~1950	米	1888(明治21)~ 1938	MES	ミソリー医学校	+	関西学院, 教文 館	大分, 神戸, 東京	
27	ヴィクトル・エム・ロ ー (Law)	米	1888(明治21)~	PE		?	立教大学校		
28	Mary Anna Holbrook (Miss)	米	1889(明治22)~ 1910	ABCFM	ミシガン大学医 学部		同志社病院	京都, 岡山, 鳥取, 神戸	
29	Mary A. Gault (Miss) → Mary A. Suganuma (Mrs.)	米	1891(明治24)~	CPM		+			
30	Nina A. Stevens (Mrs.)	米	1892(明治25)~	UCMS		+		秋田	
31	Rachel Read (Miss) 1861~1935	米	1894(明治27)~ 1935+	IND				東京, 野尻, 軽井沢	
32	William Wriothlesley Colborne 1857~1915	英	1897(明治30)~ 1915+	CMS	ロンドン大学医 学部	+		函館, 館山	98年来日 とするもの あり

33	Rudolf Bolling Teusler 1876~1934	米	1900(明治33)~ 1934+	PE	ヴァージニア州 立医大	+	聖路加国際病院	東京	
34	S. A. Lockwood	米	1902(明治35)~	SDA		+		神戸	
35	Lionel A. B. Street	米	1904(明治37)~	PE	タフツ大学医学 部			京都	
36	A. L. Dunscombe	米	1905(明治38)~	SDA		+			
37	Thos. McCloy	米	1905(明治38)~	IND		+			
38	Theodore Bliss	米	1909(明治42)~	PE		+	聖路加国際病院	東京	
39	George M. Laning	米	1910(明治43)~	PE	ミシガン大学医 学部		聖バルナバ病院	大阪	(7)の息子

第2表 宣教医を派遣したミッション一覧(略名表)(ABC 順)

	欧字略名	欧 文 名	日 本 名	来日者数
1	ABCFM	American Board of Commissioners for Foreign Missions	アメリカン・ボード・ミッション	7
2	ABS	American Bible Society	米国聖書教会	1
3	CMS	Church Missionary Society	英国教会伝道会社	1
4	CPM	Cumberland Presbyterian Mission (のち PN と併合)	米国カンバーランド長老教会	2

5	EA	Evangelical Association	米国福音教会	1
6	Edinburgh Medical	Edinburgh Medical Mission	エジンバラ医療伝道局	1
7	MEFB	Board of Foreign Missions of the Methodist Episcopal Church and Woman's Foreign Missionary Society of the M. E. Church	米国メソジスト監督教会	3
8	MES	Board of Foreign Missions of the Episcopal Church South	米国南部メソジスト基督教会	3
9	PE	Domestic and Foreign Missionary Society of the Protestant Episcopal Church in the U. S. A.	米国監督教会	8
10	PN	Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States of America	米国長老教会	3
11	RCA	Reformed Church in America	米国和蘭改革派教会	1
12	SDA	General Conference of Seventh Day Adventists	セブンスデー・アドベンチスト	2
13	UCC	United Church of Canada	カナダメソジスト教会伝道会社	1
14	UCMS	United Christian Missionary Society	基督教会	1
15	UPS	United Presbyterian Church of Scotland	スコットランド一致長老教会	1
16	IND	Independent of Any Society	独 立	3

4 来日宣教医一覧

一八五九年（安政六）より、一九一二年（明治四五）までの五三年間に来日した宣教医を第一表に示した。姓名は正確を期したが、原綴不明のものはカナ書きとした。女性には姓のあとにカッコでその旨を記した。生没年の判明しているものは姓名の下にそれを記した。配列は来日年度順とし、同一年度内はABC順とした。従ってこの表がそのまま来日順次を示すものではない。また来日年は最初の来日年を機械的に処理したものであって、この中には初回来日は宣教医としてではないもの（例えば4のD. B. McCartney）も含まれる。国別は米、英、加（カナダ）で示した。来日年と離日年は最初の来日年と最終の離日年とを記し、途中の一時帰国、離日などは一切これを記さなかった。離日年は不明のものが多し、なお日本で死亡したことの判明しているものは死亡年を記したあとで十印を付した。所属ミッションは欧字略名で示し、これの欧文名、日本名を第二表に示した。ミッションの日本名は主として小沢三郎氏（21）によった。独立のものはINDと記した。出身学校は医学関係の最終学校のみを記したが不明なものも多い。夫妻同伴の有無は、来日時の有無だけでなく、来日後に結婚したものも十として記した。主たる仕事、従事場所、および歴任地はわが国における代表的なもの、ところのみをあげた。

5 統計的観察と考察

一八五九年より一九一二年までに来日した宣教医の数は三九名。いずれも新教に属するものである。男子三二名、女子七名。国別では米国が圧倒的に多く三五名を占め、英国三名、カナダ一名でその他の国のものはない。

来日年度では一八五九年に二名、六〇年に一名、六一年に一名と初期に四名の来着者をみているが、その後六二年から七一年までの十年間には全く宣教医の来日をみていない。

一般に一八六〇年代は一般の外人宣教師の来着も少なく、小沢三郎氏の調査（21）でも十二人（同行の夫人を除く）に過ぎ

ず、しかも六四年から六八年までは一人も来日していない。この原因として考えられることは、当時のわが国がキリスト教禁制で、十分な活躍のできないことがはっきりしたこと、およびわが国への宣教師の最大の供給源であった米国において南北戦争（一八六一―一六五）があり、国力をそこにとられて海外にまで手の及ばなかったことなどがあろう。

ところが一八七二年より再び宣教医の来日が始まり七二年二名、七三年二名、七四年は最多の四名、七五年に二名、七六年に一名と五年間に十一名が来朝する。国別でも最初は米国のみであるが、この期に入ってカナダや英国が加わるようになる。七三年には前述のようにキリスト教禁制が解かれ、新教史よりみても活発な動きを示す時期である。またわが国が医学の範をドイツにとることを決めたのが六九年、実際にドイツ人教師の着任したのが七一年であるから、当時はまだドイツ医学が十分に定着していず、在日英米系宣教医が医学、医療の分野でも十分その腕をふるう余地があったわけであり、宣教医史の上からもっとも充実した数年間であるといえると思う。

以後七八年に一名、八一年に一名、八三年から八九年までは毎年一ないし四名に続き、八九年までに十三名を算する。この時期までに宣教医の七十二パーセントが来着しており、九〇年より一九一二年の二三年間には散発的に十一名が来日しているに過ぎない。

すなわち九〇年には教育勅語が發布され、国粋反動の傾向がこのころより目立つようになったことの他に、わが国のキリスト教も自立の時期となって必ずしも外人を必要としなくなったことがあげられる。それと同じことは医学、医療の面でもいえ、わが国の医学、医療もようやく独立の機運にあり、初期ほど外人に頼らなくてもよいようになったといえよう。しかしなおこれら宣教医の活動には他にみられぬユニークなものがあり、ドイツ医学隆盛の中に、清新なアメリカ医学の気風を送りこんでいたことを注目しなければならない。

さてこれら外人宣教医を所属ミッション別にみると十五ミッション（他に独立がある）に分たれ、このうちもっとも多いのは米国監督教会の八名であり、つづいてアメリカン・ボードの七名である。そして米国メソジスト監督教会、米国長老教会、米国南部メソジスト基督教会が各三名、米国カンバーランド長老教会、セブンスデー・アドベンチストが各二名

で、他ハミッシヨンは各一名づつである。なお、独立は三名である。

出身大学の判明しているもの二四名についてみると、もっとも多いのがミシガン大学医学部の五名、ついでペンシルバニア大学医学部が三名、ジェファーソン医大が二名（ペンシルバニア大学、ジェファーソン医大ともにフィラデルフィアにある）ヴァンダビルト大学二名で他は一名づつである。

夫妻同伴の有無についてみると三九名中三〇名が夫妻同伴にて来日、または来日後結婚しており、単身赴任は八名、不明一名である。

なお女子一名（29 Mary A. Gault）は来日後日本人（菅沼氏）と結婚している。夫妻同伴者の多いことは、一定期間、日本に腰をおちつけることを前提としていと考えられ、それだけ彼らの決心の堅いことをあらわしているとみたい。

彼らが主として活動した土地は函館、弘前、仙台、新潟、秋田、東京、横浜、館山、松本、静岡、京都、大阪、神戸、和歌山、岡山、鳥取、大分、長崎などである。

6 個 人 伝

ここでは来日宣教医の伝記を簡単に述べたい。ただし、今まで先人が発表したものについてはその論文名を述べるにとどめて、詳述しない。なお便宜上初期来日宣教医の各個について述べたあと、アメリカン・ボードと米国監督教会については一括してこれを述べ、さらに英国とカナダより来日のものにつき触れ、最後にその他の者について簡単に述べたい。

一、初期来日宣教医

A James Curtis Hepburn

ヘボンは一八五九年十月十八日に神奈川に到着した。米国長老教会所属。

一八五九年はわが国における新教伝来の年で、来日宣教師の最初は同年五月二日、中国より長崎に到着した米国監督教会の John Liggins である。ついで同じ教会よりの Channing Moore Williams が中国よりやはり長崎に着いた。

ヘボンはこの二人に次ぐもので新教宣教師としては第三号の来着である。もちろん彼は来日宣教医の最初 (Japan's First Medical Missionary) である。このことについては J. C. Kerr, W. Whitney, J. C. Berry も確言している。筆者は同時に彼が来日米人医師の最初だと考える。

彼の伝記は宣教医の中で質量ともにもっとも豊富である。(22) ことに高谷道男氏により彼がミッションへ送った手紙が翻訳紹介された(23)意義は大きい。

ヘボンはかつて中国で宣教医としての活動を行なった経歴があることを注目したいが、いったん帰米し十四年間も眼科医として盛名を得ていたのに、わが国開国の報をきいて、率先来日したものである。来日後約半年の一八六〇年五月より神奈川の成仏寺で診療を開始し、六一年七月には宗興寺に移っている。六二年十二月よりは横浜居留地三九番(旧谷戸橋の畔)に移りここで七六年まで医療を行なっている。

彼は「わたしは一切治療代をことわり、できる限りのものを全部日本人に捧げるつもりです」といつているが、これが大体の宣教医を通じての信念であった。彼は元来眼科医であるが、中国やわが国では広く一般外科、たとえば痔、脳水腫の手術や、四肢、指の切断術なども行なっている。彼のもとにはその人格に傾倒して弟子入りした岸田吟香のごときもあったが、宣教医本来の性格からか、日本人に対する本格的な医学教育は行なっていない。しかし彼の影響を受けた医人として佐伯理一郎氏(4)は三宅秀(東大医学部長、中島宗達(彦根病院長)、山田文友(京都療病院通訳兼当直医、京都医師会長)、川本泰年(神戸山手病院長)をあげている。

彼は一八七九年、六四歳のとき医療から手を引いた。彼はその理由を健康を害したためとしているが、その他に聖書翻訳のためと、日本に医師が増えてきたのも理由のひとつであった。医師の場合も外人が必要でなくなる日が来るであろうと述べている。

彼は医療のかたわら英辞書の編さんや、聖書和訳の事業に従事し、医療をやめてからも明治学院の初代総理になるなど、わが国の文化面に残したところはきわめて大きい。その点からいえばもっとも宣教医らしい活動をした人ともいえよ

う。

B Duane B. Simmons

シモンズ(セメンズ)はヘボンより僅かに十四日遅い、一八五九年十一月一日に神奈川に同じ米国和蘭改革派教会の Samuel R. Brown と一緒に上陸した。同船にはやはり宣教師の Guido Herman Fridolin Verbeck が乗船していたが、彼は長崎へ回り同地に第一歩を印した。フルベッキは医師ではないが、わが国がドイツ医学を採用するときに重要な役割をなしたことで知られている。シモンズが来日第二号の宣教医であることは、すでに Berry も述べているところである。彼はまた来日第二号の米人医師でもある。

一八五九年には新教宣教師六名が来日したがうち、ヘボン、シモンズの二名が宣教医である。

ところでシモンズはミッシェンより派遣されながら、翌一八六〇年にはミッシェンより離脱している。これは非常に特殊なケースでそれなりの理由がなければならないが、同僚のブラウンがミッシェンに送った手紙を高谷道男氏が紹介しているところ(24)によると、「夫人が極端なユニテリアンの信者であったため、ブラウンやヘボンなどのカルヴァン神学の立場とははなはだしくかけ離れた自由な立場にたち、家庭ではダンスやカルタをして一般居留民のようにはでな生活をした上に、主人のドクトル・シモンズも宣教師としての使命を放棄した」由である。

一従って宣教医としての彼の足跡は今日ほとんどわからないが、医師としての彼については今日かなりのことが判明している。しかしなおその生涯を知るにはかなりの資料が不足しており、小沢三郎氏の詳しい研究(21)があるが、たとえば彼の大学東校勤務のことについても近年になって小川鼎三氏の考及(22)によりようやくはっきりするなど、なお今後に残されているところは少なくない。

たとえば彼はニューヨークの出身であるが、どこで医学教育を受けたかについては知るところがない。彼は来日当初宗興寺に住み、六二年には横浜の八二番に住んだが、ミッシェン辞任後は専ら医業に従事したようで、ヘボンとともに西洋の名医としてその名が高かった。彼はその後フランス、ドイツへ医学の勉強に行き(年代不明なるも一八七〇年以前)、一八

七〇年フルベッキの推挙もあって大学東校（東大医学部前身）に一時職を奉ずるが、一八七一年横浜北仲通に仮病院（横浜市大医学部前身）が建てられ、週一回シモンズも診療を行なった。（他に早矢仕有、波多潜蔵らが診察）一八七二年には野毛山に本病院を造り、横浜共立病院と称し松山棟庵を総括としたが、シモンズは松山とも親しく、のち一八七八年にはこの二人らを中心に東京有楽町に共立病院を創り、横浜のそれ（一八七四年より十全医院と改称し県立となる）とともに米系医学の拠点となった。シモンズはこれより先一八七二年より週二回、隈川宗悦の宅で診療にあたっている。一八七六年には東京尾張町に眼科医院を開き、月に三回横浜より出張しているが、のちこれも上述の共立病院に合併された。しかしこれは一八七九年に廃止されている。（26）

シモンズは福沢諭吉とも親交があったが、これは福沢が一八七〇年五月発疹チフスに罹ったさい、最初ヘボンに往診を依頼したが、ヘボンにさしつかえがあってシモンズを紹介した。それ以来の交誼である。一八七〇年十月十四日、福沢の九鬼隆義（播州三田藩知事）への手紙に以下のように記されている。「当五月中旬より罹り、（中略）今日此都下に居り、此良医の治療を蒙り、此良友の介抱を受け始めて此全快を取り候義、所謝は医師と社中の朋友に御座候。医師はアメリカ人セメンズ、英人ウエルス（注、ウイリスか。しかしウイリスは前年末、すでに鹿児島に移つてこのときは不在のはず）兩人を頼み、療法頗る新奇（中略）、先づ日本にては最上の治療を施し候事に御座候」（27）

福沢は同じ一八七〇年に「肉食の説」なる小文を記しているが、これはチフスのさい築地牛馬会社の牛乳を用いたが、病後同会社の需めに応じて書いて与えた宣伝文である。福沢は上述の書簡内にも「毎日肉食牛乳等相用、養生のみに心掛居候」と記しているが、これもシモンズのすすめによるところが大であったと思われる。シモンズはすでに慶応年間に中川嘉兵衛（函館氷製造で有名）の世話をし、彼に牛乳製造を行なわしめている。（21）

福沢は慶応義塾構内に家を建ててシモンズを住まわせ、時事新報にしばしば彼のエッセイを載せた。一八八九年二月十九日、母一人を残して腎炎で死亡、横浜居留地ユニオン・チャーチで二三日葬儀が行なわれた。福沢は彼のため碑文をもつし、これは現在青山墓地にある。同月、高木兼寛の主宰する成医会でシモンズの追悼会が行なわれ、福沢はこれに出席

して追悼演説をしている。(28)

W. N. Whitney は一八八四年、シモンズの医学論文九篇をあげている(6)が、その中の一篇 The Diseases of Japan は The Medical Record の一八八一年発行の十九卷九〇ページより九二ページに記されたものでチフス、赤痢、コレラ、脚気、梅毒などについて述べたものでそのときの肩書きは十全医院の Director and Surgeon-in-Chief となっている。それより先一八七九年にやはり Medical Record に Cholera in Japan という小文を投じたときには Health Officer for the Japanese Government for the Ports of Yokohama and Tokio と記しており、また他の論文では Surgeon to Kerr Hospital と記しているが、これに対応する日本職名が何であったか知るところはない。

C H. Ernest Schmid

シュミッドは生没年、出身大学ともに不明。従来 Schmidt と記しているものが多いが誤りである。

一八六〇年四月来朝、来日宣教医第三号。米国監督教会派遣宣教師としても Liggins, Williams にづく第三号である。米国監督教会は一八二〇年創立、一八五九年三月、日本伝道開始を決め、上述二名の宣教師を任命したが、そのときさらに一名の宣教医を派遣することを決議し、資格ある医師を募集したが、これに応じて来任したのがシュミッドである。彼はそれまで中国に在留していた。しかるに彼は健康を害して翌一八六一年十一月帰国のやむなきに至った。

一八六一年、ミッシンあての書簡の中で彼は若干の医学生に英語を教えているが、それは「日本語に訳し能わざる医学上の術語を彼らに了解せしめ、もって誤解のおそれなく彼らを使用せんため」であるといい、「和英対照の医学字彙を編集」しているといっているが、この医学字彙が完成したかどうかは不明であり、おそらく成らなかったであろう。同年三月の書簡では上海で中国人を治療したが結果はよくなかった。それはしばらく外人医師の薬を用いて改善せねば、また土着の医師のところへ行く。しかも医師の指導を守らず、薬も規定どおり使用しない。日本でも同様の思想ありということが中国ほどではないことを希望していると述べている。(29)(30)

ウィリアムズはシュミッドのわが国における医療活動が成功したことを報告し、やがて同博士一人の手にては便じきれ

なくなるであろうといっているが、それだけに病氣帰国は残念であったようである。米国監督教会最初の来日たるリギンヌも病氣帰国しており、わが国の風土は外人にはかなりきびしかった場合もあると考えられる。

D Divie Bethune McCartee

マッカーターはヘボンと同じ米国長老教会の宣教医であるが、最初（一八六一）および二度目（一八七二）に日本に来たときは宣教医としてではない。しかも三度目（一八八八）の来日のときも医療を行なった形跡は少ない。ペンシルバニア大学医学部を卒え、一八四四年、中国寧波に行き、切断術の成功や、内障眼患者の視力回復など活発な医療活動を行なっている。

一八六一年十二月、健康のため休暇を得て日本へ来航、翌年四月まで横浜および長崎に滞在。長崎でフルベッキに会い、二度目の来日のさいは彼の推挙で開成学校の御雇教師となり人身及比較解剖学、生理学などを教えている。一八七七年、上海の駐支米国総領事館よりの招きで中国に戻ったが、一八八八年三たび来日した。（21）日華両国語ができたので駐日支那公使館顧問として活躍した。（15）

二、アメリカン・ボード

アメリカン・ボード・ミッション（以下アメリカン・ボードと略す）は組合教会 Congregational Church に属し一八一〇年に創立、一八二七年に日本伝道を提議しているが、実際にわが国に宣教師の派遣されたのは一八六九年で Daniel Crosby Greene が横浜に到着している。

アメリカン・ボードはすでに関東には他の新教各派があつて伝道に従事していること、当時関西は人口分布の上からみても中心地的存在であり、関東より一層健康地であるなどの理由で、関西（京都、大阪、神戸）に拠点を置き、グリーンも翌年には神戸に移っている。その後岡山、新潟、仙台などにも進出している。（32）（33）

アメリカン・ボードより来日の宣教医は第一表からも明らかなようにつぎの七名があげられる。John Cutting Berry, Marquis Lafayette Gordon, Wallace Taylor, Arthur H. Adams, Doremus Scudder, Sara Craing Buckley, Mary

Anna Holbrook

すなわちアメリカン・ボード派遣の来日宣教医の最初は一八七二年のベリーである。同年にはさらに一名の来日があり、一八七四年にも二人が来ている。以後十一年間は来日なく、一八八五年に一名、八六年に一名、八九年に一名の来日があり、以後一九一二年（明治四五年）までの来日者はゼロである。アメリカン・ボードの活躍が著明であった明治前半期に来日者が集中していることが目立ち、さらにその中でも著明な働きをしたベリー、ゴードン、テイラー、アダムスの四人が一八七四年までに来ていることが注目される。しかもこの四人はいずれも大阪、京都が活躍の主たる場所であった。ことに同志社にはベリー、ゴードン、テイラーが関係し、さらにバックレーも関係をもっている。当然これら宣教医間の連絡も密で、協力態勢がよくとられていることは他派にみられぬ特徴である。また同派からは京都看病婦学校・同志社病院が設立された関係で三人の宣教看護婦（Linda Richards 在日 1886~90, Ida V. Smith 1888~91, Helen E. Fraser 1891~96）の派遣をみていることも特記さるべきである。

A John Cutting Berry

ベリーは明治になって来日した宣教医の最初であり、一八七二年より二一年間のわが国での活躍はヘボンに勝るとも劣らぬものをもっていると言えいえる。ベリー来日当時のわが国医学の水準はなお低く、彼がその面で貢献したところは大きい。ことに一八八六年、新島襄の依頼を受けて同志社病院とともに設立した京都看病婦学校は、わが国に近代看護を導入したものである。

彼はジェファースン医大卒、二五歳で来日、神戸に診療所を設け、兵庫県立神戸病院とも関係をもち、ここで解剖を行った。その他有馬、三田、明石、加古川はじめ兵庫県の各地で診療に従事、この間、監獄問題に関心をもち、一八七六年に大久保利通内務卿に獄舎報告並びに改良見込書を提出している。一八七九年より岡山県立病院の顧問となり、さらに同県倉敷、高梁、惣社などで医療活動。一八八六年より前述同志社病院々長、京都看病婦学校教師として勤務す。一八九三年離日。

ベリーはこのように宣教医として来日したものであるが、兵庫県および岡山県と関連をもつに至り、その面からいえば「お雇い外人」の性格をもつものである。ただ一般のお雇いと違うところは給与がきわめて低いか無料であることで、たとえば神戸病院では最初の外人医師 (Waddel) が年俸六、二五〇ドル、*W. Van den Heyden* が月俸三三〇ドルであったのに、ベリーは給与を受けなかった。また岡山では「給与一ヶ年日本紙幣二〇〇円」という低額であったが彼はこれをも私しなかったようである。

さてベリーの研究についてはかなりのものがあるが、代表的なものは大久保利武編「日本に於けるベリー翁」(一九二九)(34)である。彼の娘 Katherine Fiske Berry の著わした著(35)も有用である。その他岡山時代のベリーについては守屋茂氏(36)、浜崎美景氏(37)の論著に詳しく、京都看病婦学校については佐伯理一郎氏(38)の著がある。筆者もベリー(39)、京都看病婦学校(40)について小考察を試みた。

川村大膳氏はアメリカン・ボードから日本に派遣された宣教師が本国の本部へ書き送った筆記の原史料をマイクロフィルムに収めて関西学院大学史学研究室に移された。そしてその一部を翻訳、紹介(41)(42)された。これは発信人別、年順にファイルされており、川村氏は筆者にも心よく閲覧を許して下さった。小生はまずこれをベリーについてみてみたが、それは来日一年余り前の一八七一年三月二三日、スモール・ポイント発に始まり、一八七二年四月四日発まで十三通までが在米中のもので、次便は同年六月十七日神戸発(注、彼の来日は五月末か六月初め、横浜)となっておりこのときは十一頁にわたる長文である。

以後、七月十九日、八月十七日、十一月九日、十二月二日、七三年二月一五日、三月二三日、四月十五日と続いている。四月十五日の分のごときは十六頁にわたる。以後延々と彼の書簡が続くわけであるが、これらはいずれも未公開の第一次史料である。残念なことに読解力、語学力に乏しい筆者には重荷であって未だ利用の域に達していない。

B Marquis Lafayette Gordon

ゴードンは医学教育を Long Island College Hospital に受け、(N. Y. Coll. of Phys. and Sur. に受けたものもある)

一八七二年卒業。

同年十月日本に着いた。七七年まで大阪にあり、川口与力町三番地に居住。七九年より九九年帰国まで京都にあり、同志社で教えた。彼が医業を行なったことを示す史料はほとんどないが大阪では開業していたようである。

同志社では牧会学、社会学を講じ、努めて社会学的研究を奨励した。同志社病院の顧問にはなっていたがスタッフではなかった。彼には *An American Missionary in Japan, 1892, 第三十三年 Eventful Years—The Story of the American Board's Mission in Japan 1869~1899 (43)* なる著があるが、あとの書の発刊一九〇一年を待たずにその前に母国で死亡した。

C Wallace Taylor

テイラーは一八七一年ミシガン大学医学部卒、七四年一月一日アメリカン、ボードより派遣で神戸着。大阪に移り浪花施療院、長春病院などに関係。七五年四月、岡山県は岡山病院へ學術研究のため彼を招こうとし、種々政府と折衝の結果、彼は九月より六カ月の契約で赴任したが、四一日後の十月、やむをえざる事故（内容不明）で辞職を申し出ている。（44）

同年十一月、同志社は彼を人身窮理、化学の教師として雇い入れたとしたが、関係官庁の許可が容易に出ず七六年三月になって許されたが、彼の府民治療等についての申請（同年十二月）は認められず、七八年五月には彼が府民を診療し医業を与えたことについて新島襄が取調べを受け、結局彼は解約され神戸に移った。同年より長春病院の経営を引き受けている。九一年同院より発行の *Report of the Osaka Medical Work of the Japan Mission, ABCFM, Osaka*（旧佐伯理一郎蔵）によれば同年の患者数二、五三三、相談受付数一〇、九八六、手術数三三七となっている。（後述）彼は腹部手術、

婦人科手術にとくに優れていた。八五年の大阪中河内稲田村大洪水、九一年の濃尾大地震などには長春病院より救護班を派遣している。また当時医学界で大問題であった脚気にもとりくみ、八六年に論著 *Studies in Japanese "Kakke", or Beriberi* を公刊しており、東京医事新誌にも『脚気病実験説』を発表している。一九〇〇年の *Tokyo Missionary Conference 第二 Medical Work—Its Results and Prospects (45)* と題して述べている。在日三十七年、十二年に帰国、二三

年に死亡した。

D Arthur H. Adams

エール大学医学部卒、一八七四年十一月二六日横濱着。同船には新島襄も乗っていた。七五年一月大阪に至り、同地最初の医療協会 Health Society を設立。同年梅本町公会員となった医師松村矩明（福井県出身、廣列伊氏解剖訓蒙図 明治五年の訳編などがある）は医師高木玄真とはかって病院を建てアダムスを招聘しようとしたが、市民の偏見のため実現に至らず七七年に至って松村、アダムス両名は東区高麗橋四丁目に松村診療所を設け、医療伝道を行なった。長春病院を設立したのもアダムスといわれる。七八年帰国したが、七九年再度来日の途上、腸チフスにて船中で死亡した。

川村大膳氏の研究(42)によれば、アダムスがミッション本部へ送った手紙は四五信が保管されており、一八七四年七月七日ニューヘブンの第一信より九月二五日の第九信までは米国から出され、第十信は十二月十日横濱より、十一信は十二月二三日大阪より、以後七八年九月の大阪よりのものまで在日期间中に二八信であり、同年十二月三〇日にはオークランドより、以後最後のノルドホーフ発七九年十月十三日のものまで八信の各よりなっている。

E Doremus Scudder

シカゴ医大卒、一八八五、姉とともに新潟に着く。八八年には父母も来日、来新した。彼は医療にも従事したが、すでに新潟医学学校がかなりのレベルに達しており、その他の医学校出身の医師も多くいたので、医業にはあまり力をいれなかった。八六年、新潟に邦人牧師として当時大和郡山の教会にいた成瀬仁蔵（日本女子大学創立者）を招聘、また医師阿部宗益の息子、阿部欽次郎になる新潟英語学校の英語の教師をしていたが、成瀬来信にともないこれを教会に寄付せしめ、八七年北越学館（のち北越学院）として新発足せしめた。（蒲原宏氏、平田義夫氏の指示による）(46)

F Sara Craing Buckley ㄅ Mary Anna Holbrook

バックレーはミシガン大学医学部卒、一八八六年夫の Edmund Buckley 在日 1886~92 とともに来日、夫は同志社神学校教授、彼女は同志社病院において婦人科、小児科、眼科を担任し、看病婦学校にては看護法を教授した。ホルブルッ

クもまたミシガン大学医学部出身で一八八九年来日、京都看病婦学校には看護婦 Linda Richards (アメリカ最初の資格看護婦) がいたが、その補助者として看護婦 Ida V. Smith が来ていた。しかし一時スミスが新潟で働くことになり、リチャーズも健康を害したので、最初鳥取へ行く予定だったのを少し延期し、スミスの帰任まで京都看病婦学校で働らいた。のち岡山、鳥取、神戸にも行ったようであるが詳しいことはわからない。

三、米国監督教会

米国監督教会はわが国の伝道に熱心であり、一八六〇年早くも H. Ernest Schmid を送ったことについては前述した。その後、宣教医の来日はしばらく途絶えたが、機関誌 Spirit of Missions にて来日宣教医希望者を募集したところ、これに応じて来朝したのが、Henry Lanning で一八七三年、大阪に着いた。

その後はまたしばらく来日する者がなかったが、八四年に至って Frank W. Harrell が来着している。その後八八年にヴィクトル・エム・ローが来ているが、現在のところ彼について知るところはない。一九〇〇年になって有名な Rudolf Bolling Tensler が来ている。ランニングが大阪で聖バルナバ病院を建てたのに対して、彼は東京に聖路加国際病院を建てた。この二院は現在に至るまで続き、ひとりミッション・ホスピタルとしてのみならずわが国病院史の上で特異な位置を占めているのは人の知るところである。一九〇四年には Lionel A. B. Street が京都に来、一九〇九年には T. Bliss が聖路加病院に来、一〇年には Henry Lanning の息 George M. Lanning が、聖バルナバ病院に来ている。

米国監督教会はその後積極的に医師をわが国に送り、一九一二年以降四三年までに九名に達しており、これはこの間の合計来日者数十六名の半数以上を占める。そのうち三名は聖バルナバ病院に関係を有するものであり、一名は聖路加国際病院の医師である。なお、両病院には宣教看護婦も幾人か来ている。(47)

A Henry Lanning

Lanning と記すものもあるが Lanning が正しい。ミシガン大学にて医学を修め、南北戦争で北軍に投じ、戦後ネヴァダ州で開業したが、のちニューヨークに帰りシクラサで開業。

米国監督教会が来日宣教医を募集しているのを知り「有利なシラクサ市に開業せんとする医師ははなはだ多い。しかし薄給にて困難なる日本派遣の宣教医に應ずるものは少数であろう」と考え決然と自ら応じた。米国監督教会の機関誌 *Spirit of Missions* 一八七三年の二五八頁には *Appointment of a Missionary Physician to Japan* と題してラングが応じてくれたことを報じ、ついで六四六頁、七月十日付大阪発で *Dr. Laning's Arrival* と題して近着の船で彼が来着したことを報じている。(七月四日着)西区与力町に診療所を開き、一八八二年、照暗女学校(平安女学校前身)の教員ミキ嬢と結婚。八三年九月、川口町五番館に聖バルナバ病院の建築がなり診療開始、なお医療器具は一時帰国のさい英国で購入してきたものであった。八四年六月三日付で *Spirit of Missions* に聖バルナバ病院の報告を登載している。昨年九月の開院より現在までの外来患者数は四、〇七三(うち男二、四五七、女一、六一六)、入院患者四七(うち男三七、女一〇)、平均在院日数三八日、十四名全治、十八名略治、二名不変、三名死亡、十名在院中、入院患者の四三パーセントは外科的処置を行なった。三名の死亡のうち一人は最初から死に瀕しており、一人は小児の脳膜炎であり、一人は肺結核の少女であった。入院患者中九名は無料、三名は半額のみ徴収した。一九一五年帰米、一七年一月一日死亡。昭和二年病院は現在地天王寺区細工谷町に移った。現在は産婦人科を中心とした病院となっている。

B Frank W. Harrell

一八八四年築地で診療所を開いた。米国監督教会における東京での医療伝道の最初である。八九年、仙台最初の英語教師となる。田所美治、井上準之助、高山樗牛のごとき俊才を輩出、七ヶ浜村菖蒲田の外人避暑地は彼の首唱して創設せるもの、一九〇四年メキシコで没。(重久篤太郎氏による)

Spirit of Missions に一八八四年四月二五日、東京発書信あり、大阪にラングを訪うたとある。五月二九日付では五月十二日より診療所を開き、一三六人の患者を診、十二人の土地の医師からの相談があったと。そして自分の仕事には二つの障害がある。一つは語学力の欠如であり、一つは土地の人の住宅でやっているので外科的処置が十分に行なえないことである。第一についてはやがて時が解決するだろうし、第二についてはまもなく病院が建てられることを希望するとし

ている。

C Rudolf Bolling Teusler

トイスラーについては中村徳吉氏の小伝(48)で大体のことが出来る。彼は一八九二年、十六歳でリッチモンドの州立医科大学に入った。医科課程を二年で卒え、九四年四月には医師免許を受けている。九八年結婚。九九年、夫人の兄弟のウッドワード医師より東京にあき家の小さい病院があるが将来性も乏しいことをきき、却って宣教医として東京へ行くを望んだ。一九〇〇年、二四歳で来日した彼は築地十三番に住み、以前から築地病院としてあったが二年來閉鎖中の施設の改造に乗りだした。同年立教女学校卒業の荒木いよを米国に送り、看護学を学ばしめ一九〇二年帰国後看護業務につき、のち同病院の総婦長となった。同年より東大卒の医師、久保徳太郎がともに働くこととなった。同院には東大からスクリバやベルツも来て治療にあたるなど東大との連けいは密であった。その後病院を拡張したが一九二三年の震災、二五年の火災にあうなどの困難があったが、ついに三年に新病院が完成し、三六年には二期工事も完成した。三四年彼は同病院で死亡した。看護婦教育、公衆衛生事業、医療社会事業、近代病院管理などにも新生面を開いたことはよく知られているところである。

四、英・加よりの来日宣教医

米国外より宣教医は筆者の知るところカナダより一名(Davidson Macdonald)、英国より三名(Henry Faude, Theobald Adrian Palm, William Wriothesley Colborne)の計四名のみである。

A Davidson Macdonald

カナダのトロント大学医学部出身。一八七三年来日、横浜にいたが、七四年四月より静岡に赴任、賤機(シズハタ)舎で物理、化学、博物、地理、歴史、語学などを教えた。七六年十二月より県立として再発足の静岡病院(のち市立静岡病院)の顧問となり、診療と医学教育に従事、火、木、土曜の二時から無料診療を行ない、自費で出張し東は沼津、西は島田あたりまでにおよび名声高く、東京のベルツ(七六年来日)と並び称された。医学教育は屋形町の門長屋の教室で行なわれ

た。七八年三月帰国したが翌年再来、東京築地に居住、一九〇四年に至った。(49) 帰国翌年、トロントで没。なお彼は新潟女学校で英語の教師をしたことがある(蒲原宏氏による) 由なるも去就の年月は不明。

B Henry Faulds

彼については重久篤太郎氏の研究(50)に詳しく、八十島信之助氏(51)も述べている。英国グラスゴーのアンダーソン大学で医学を修め、セント・トーマス病院で実習、スコットランド一致長老教会が日本伝道を開始した一八七四年三月、同派最初の宣教師として来日。英人来日宣教医の最初。築地居留地十八番地に住みそこに施療所を設け、翌七五年築地小田原町十番地新栄橋付近に健康社(英名は築地ホスピタル)を開く。ミッション・ホスピタルの最初で病床は十。病理解剖をししばし行ない、外科防腐処置を導入(後述)、一般外科手術の他に眼科手術を行なった。七八年、東大の Edward Sylvester Morse の発掘した大森貝塚の土器についての指紋を観察、八〇年、イギリスの雑誌 Nature に On the Skin-furrows of the Hand として発表、指紋を個人の識別に応用しようとした最初の論文。また Transaction of Asiatic Society of Japan. VI (1876) にも論文を発表している。

七六、七七年には第一回、第二回築地病院年報も出している由なるも未見。また上記モースは七七年、わが国に進化論を紹介したが、フォールズはこれに反対、築地病院内でその連続講演会を行ない、また居留地の英字新聞ジャパン・ガゼットに反対論を投稿した。彼は盲人救護の面でも功績を残した。彼には "Nine Years in Nippon—Sketches of Japanese Life and Manners—London, 1885 なる著がある。

C Theobald Adrian Palm

パームについては蒲原宏氏の研究(52)に詳しい。大島蘭三郎氏(53)も彼について述べている。一八七三年にエジンバラ大学医学部を卒え、翌年(同年とするものもある) 日本に来た。エジンバラ医療伝道局よりわが国へ派遣されたのは彼一人だが、中国へは何人かを送りこんでいる。新潟で医療伝道に従事したが、欧文で書かれた最初のつつが虫病報告をなした(Edinburgh Medical Journal, 1875) ほか、脚気、佝僂病に関する研究(同病に対する太陽光線の価値を強調)がある。また八

三年、大阪で開かれた宣教師会議に「医療伝道の位置」なる講演をなしている。(54)なお彼が去ったあとの新潟における事業はアメリカン・ボードが継承した。帰国(八三年、ただし八四、八五とするものもある)後も医業を行ない、一九二四年に尙俤病に関する研究を記念しての「陽の光連盟」(Sunlight League)の会長に推された。彼は新潟時代市民よりの尊敬を集めその病院は「パンの病院」といわれ、「パームは死者をも生かす」とされた。ことに外科と眼科に秀でていたようである。(平田義夫氏の教示による)

D William Wriothsley Colborne

ロンドン大学医学部を卒え、英国教会伝道会社(聖公会)よりの派遣で一八九七年来着。彼はその前にケープ・タウン、広東で医療伝道に従事し、当時上海の病院で働いていた同国人女性と結婚した。英国聖公会よりは最初の宣教医としてわが国に來り、函館に病院を建て医療を行なった。しかるに後年突然偏麻痺におちいり、医業をやめざるをえなくなり、千葉県の館山に移った。彼の病状は一時軽快したものの結局一九一四年死亡した。彼の妻も千葉県で伝道に従事した。(木村信一氏、渡辺正直氏の教示による)

五、その他

A Willis Norton Whitney

彼はミッシオンに所属せず、所謂独立である。彼は自らを Missionary Doctor と規定せず Christian Doctor であるといっていた由。なおホイットニーでなく、ホイトニーである。(西川孝次郎氏の教示による)

彼のことについては M. C. Whitney, (ホイトニー夫人) Clara W. Kaji になる伝記(55)の他、鮫島近二氏(56)、吉岡孝治郎氏(57)などの記載があり、比較的よく知られている。

ホイトニーの著として吉岡氏はつぎをあげている。

- (a) 日本における道路、主要都市、郵便局、簡易辞典
- (b) ヘボン辞典の漢字索引

(c) Notes on the History of Medical Progress in Japan, 1885

(d) 米国の総合雑誌、医学雑誌へ多数の論文寄稿

(e) 日本人の医学、近接学科に関する論文の抄録、または論題リストを米国で紹介

(f) わが国の新聞、雑誌の論説、論文を米国々務省へ提供

このうちもっとも有名なものは(c)で、これは日本の医学史をまとめたものであり、英文の日本医学史として最初のみならず、わが国でも富士川游の「日本医学史」(一九〇三)に先立つもっとも注目すべき業績であるといえよう。これは四年五月二一日講演したものを Transaction of the Asiatic Society of Japan 第十二号に発表したもので、一九〇五年、単行本として立教学院から出版したという。最初に杉田玄白の立像を配し、A 5判二二二頁。明治以降の医学史、これに来自外人については詳しく記しており、巻末には「日本および西洋における医学進歩に関係または影響する主要事件比較表」と漢英両語による中国と日本の医書目録(二五九四部)、文献などがあり有用である。

ホイットニーは一八八三年より九五年まで、米国公使館の通訳官であった関係もあって、(e)(f)のような仕事をしたと思われるが、米国政府から資金を得てわが国の古医書を買集め、これを本国に送った。これは現在ワシントンの国会図書館に蔵されているという。(中里龍瑛、医学図書館、第八巻五号、一〇四頁、一九六二)(a)も彼の通訳官のときの仕事で原題は A Concise Dictionary of the Principal Roads, Chief Towns and Villages of Japans, with Populations, Post Offices, etc.: Together with Lists of Ken, Kuni, Kōri, and Railways である。

彼の医学関係の論文としては脚気に関するもの、わが国の盲人についてのもの、色盲について、皇国医事沿革小史の翻訳などがある。

ホイットニーは一八七五年、二〇歳で来日、その後横浜で二人の外人医師(その一人はヘボンらしい)につき眼科学などを学んだが、七八年より石川県中教師範学校(金沢大学教育学部前身)の理化学の教師となり、七九年夏のコレラで同校が一時休校となったので東京へ帰り(津田進三氏の教示による)帰京後東大医学部に入学、翌八〇年まで一年在学して帰米し、ペン

シルバニア大学医学部三年に編入、八一年卒業、ドクターの称号を得た。

彼は東大医学部最初の米人学生という(55)が、これを裏付ける東大側の資料がない。(小川鼎三氏の教示による)鮫島氏は聴講生ではなかったらうかという東大の推論を紹介し、中里氏は『ベルツの日記』七九年九月二二日の項に「夜はホイットニー家、質素な米人の家庭で息子が自分の生徒である」(菅沼龍太郎訳による)とあるにより、東大入学の事実が証されるとする。とにかくペンシルバニア大学の三年に編入できたのだから、当時二学年までの課程がわが国で了えていたものと判定されたのであろう。

彼は高木兼寛、実吉安純らと交わり成医会に関係するなど英米系医学の定着に貢献するところ大であったが、八六年より赤坂氷川町十七番地に赤坂病院を建て、眼科、普通科の診療を行なった。一九〇四年、病床二二、入院患者二〇七名、外来患者延一万五千人、彼が離日の一年には病床三〇となっていたが、入院は眼科が主であった。これより先、一八九七年、赤坂病院分院衛生園が淀橋町角筈にできているが、これはもと宣教師 Maria T. Pitcher True や、ペンシルバニア女子医大卒の岡見京子らによって創られたものが、赤坂病院と関係をもつに至ったものである。なお当時の赤坂病院長は北島剛三であるが彼についてはよくわからない。

彼の帰国後、一九一三年に英国から William R. Watson が来てその仕事を継いだ。彼もミッシオンに属さず独立である。来日が大正二年であるから、本稿のリストには載せていない。

B Fredrick Kreckler

クレッカーはジェファースン医大を出、南北戦争に海軍の外科医として働き、一八七六年、米国福音教会派遣の最初の宣教師として来日した。居ること六年数カ月、八三年死亡した。ホイットニーの記録によると同年四月十七日に彼の母が死去したが、丁度そのころクレッカーの往診を頼まれた。診たところよくはあるが未だ人事不省であるとする。腸チフスだったようで、二六日に死亡、二七日に青山に葬る。ホイットニーの母の墓の近くへ葬ったとあるが、現在両者の墓は隣あっている。

彼の在日中の医学上の仕事については知るところがない。

C Alexander Durham Hail

ヘールはクリーブランド医大で一年間医学を修めたのち、一八七八年、米国カンバーランド長老教会より派遣されて来日。その前年に来ていた弟 John Baxter Hail とともに大阪で伝道に従事。八一年よりは和歌山県下にも伝道にでかけ、そのさい患者を診ることもあった。八四年にウイルミナ女学校（大阪女学院前身）を創始。八六年病氣のために帰米したが一年後再来。一九二三年死亡。大阪阿倍野墓地に葬られたが、現在は服部緑地内にある墓地に改葬されている。田中米氏の手記によると「一八八五年、大阪に天然痘大流行のさい、ヘール師、ウイルミナ女学校生徒に初めて種痘をして下さったお蔭で罹病を免れた」とある。晩年に及んで大阪府下外島保健院における癩病患者に多大の同情を注いだという。（金沢武夫氏の教示による）(58)(59)(60)

D F. E. Porter

ミス・ポーター（ポートル）は二三歳で一八八二年来日、翌年より兄のいた金沢に移り北陸英和学校で教えた。八六年、同地に英和幼稚園を創り、東京師範学校出身の吉田あつを招いて開園した。一九〇一年までポーターが園長であった。晩年は京都五条坂にいたが、のち帰国したようである。（津田進三氏の教示による）彼女が金沢で医業を行なった形跡はないが A. A. Bennett の文（〜）に Rev. G. W. Fulton writes, "Formerly Mrs. Porter practiced medicine in Kanazawa," とあり後考にまちたい。

D Herbert W. Schwarz

シュワルツは米国メソジスト監督教会より一八八四年（八五年とするものあり）来日。八八年まで仙台在住し宮城中学校に関係、九〇年、東奥義塾教師となる。おること二年再び仙台へ。九八年帰米、一九〇五年再度渡来後松本に布教すること二年にして三たび仙台に至り四年間布教。のち横浜聖書会社に五ヶ年在勤、一六年に帰国（重久篤太郎氏の教示による）生江氏（5）によれば彼は彼は布教の他、あるいは育児事業の主管となり、あるいは私財を投じて貧病者の救済にあたるなどし

た。病いを得てやむなく帰国し五年後の二二年ワシントン病院で死亡したという。

E Walter Russel Lambuth

ランバスは中国で宣教師の子として生れ、一八六九年健康を害して帰米。ヴァンダビルト大学で医学を修め、ベルビュー病院よりMDの称号を得た。八二年妻とともに中国に行き医療伝道を行なう。八六年来日、同年より米国南部メソジスト教会が日本伝道を開始したのに呼応した。同年パルモア学院、広島女学院創立、八九年関西学院創立、九二年健康を害して帰国、一九一一年アフリカ伝道のためコンゴ着、その後各国を訪れ、二〇年にはシベリア伝道開始、二一年わが国へ再来、在日僅か二九日で九月二六日死亡。彼のわが国における医療については明らかでないが、宇和島を訪れたさい、旧藩主伊達宗紀(春山)が病床にあり、彼も招かれて診察した。神戸に帰ってから、病人のため若干の食料と薬品に聖書をそえて送り届けて喜ばれたという。彼は *Medical Mission* という著書を一九二〇年に出版している由である。(61) (武藤誠氏の教示による)

F Mary A. Gault

ゴールトは一八九一年五月三日、米国カンバーランド長老教会がテキサス州ダラスで行なった婦人伝道局の集会で宣教師に任命され聖別され、同年七月日本に着き、すぐに宣教師の健康管理と日本人の治療の仕事を始めた。九二年までミッシェンと関係を保ったが、その年大阪第一教会の会員菅沼氏と結婚した。九三年長崎に移り診療所を開いた。キリスト教共励会の活動に熱心であった。(7) (59)

7 宣教師の行なった医療

一、その特性

宣教師の大半はアメリカより来たわけであるが、十九世紀のアメリカの医学教育はどのようなものであったか。それはまだ近代的なものではなく、修学年限も一〜三年のものが多く、入学資格も低かった。病院で医学教育が行なわれて、そ

こでMDの資格が与えられることもあった。アメリカで近代的な医学教育が行なわれるようになったのは一九一〇年、いわゆるフレキシナー報告がでて以来のこととされる。十九世紀の医学の中心はなお、欧州なканづくドイツにあったがフランス、イギリスもかなりの水準を保っていた。アメリカよりこれらの国へ留学したものが多く、わが国へ来た宣教医も医学の再教育をこれらの国へ行って受けたものが少なくない。このように必ずしも高水準な医学を身につけたわけではない宣教医がわが国に來たわけであるが、彼らの医学は少なくとも科学的な西洋医学に立脚したものであった。

一方わが国は南蛮医学からオランダ医学が注目を集め、一部でそれが行なわれていたもののまだ幕末から明治初期にかけては、東洋医学が大勢を占め、系統的な医学教育、近代医学、医療の発生はほとんどみられなかった。

明治に入って医学のみならず、わが国文化、社会、産業などの急激な西欧化への傾斜がはじまるが、彼ら宣教医はまさにこの導入期に主力が來着したのであった。それは同時にわが国への新教の移入、定着の歴史とも軌を一にし、キリスト教禁制が解かれた明治六年前後に宣教医來着数のピークがみられる。

當時の医学は現在ほどの分化がみられなかったことと、一応なんでもこなさねばならなかったところから、宣教医に現在のような専門化を求めることは困難である。しかし彼我の医学の差がもつとも歴然とあらわれるためか、外科に主力をおくものが多くあった。それと眼科を主としたものが多い。

わが国における英米系の医学はオランダ医学からドイツ医学へ移る、その過渡期に開花したわけであるが、その英米系医学の一端をになったのが彼ら宣教医たちの医学であった。しかし同じ西洋医学に立脚する宣教医の医学に特別の位置を与えることは困難であり、わが国における西洋医学の定着の過程で、これをとらえることが必要である。

彼ら宣教医の医学・医療のわが国に及ぼした影響は決して少なくないが、これをオランダやドイツのお雇い外人と比すとその差は明瞭である。ポンペにしるベルツにしる、わが国より丁重に迎えられ、恵まれた環境の中で思うとおりの医学教育が可能であった。そしてわが国に近代医学を植えつけることが目的であった。宣教医の目標は異教の地に伝道することであり、彼らを迎えたのは警戒と排他的まなざしであった。のち彼らの高潔な人格に触れてその門に入ったものも少な

くはなかったが、宣教医本来の性格もあって一つの学統を築くところまでは行かなかった。中国ではホブソンやカーのように宣教医で医学書をあらわしたものもあるが、わが国の場合はどういふわけか、宣教医の著述で広く行なわれたものは少ない。

彼ら宣教医の特性は自ら民衆の中に入っていく、医療を通じて西洋文化をわが国に伝えたことであつた。聖書がその最大・最終の武器であつたことはいふまでもないが、彼らは必ずしもそれを前面には打ち出さなかつた。彼等の医療伝道がわが国の社会救護に新しい道を開き、文化の向上に役立ったことは疑いのない事実である。

二、ヘボンとフォールズの場合

ここで宣教医の医学・医療についていふ少し詳しくみてみたい。

その一は有名なヘボンによる沢村田之助の脱疽の手術である。田之助の治療は松本良順により行なわれていたが、切断の要ありと認めてヘボンに紹介したものである。この切断術は一八六七年九月十五日、クロロホルム麻酔によつて行なわれ、その後アメリカへ義足を注文し、翌年四月これが到着した。さてわが国における切断術はすでに周知の如く本間玄調（一八五七）のそれがあり彼が最初ではない。またヘボン自身すでに中国在留の四四一四五年ころ指の切断術を行なっているし、六五年三月にも鉄砲の事前発火で腕に負傷した日本人砲兵の腕の切断を行なっており、六七年には下顎の一部分の切断もしている。つぎにクロロホルム麻酔は四七年の創始であるが、すでに六一年ボンペが紹介しており、また伊東玄朴が同年六月下肢切断術にこれを使用している。義足については六七年春発行の伊藤慎蔵翻刻の『改正磁石靈震氣療説』中に「スタニール」ノ官許廻国足」として図解入りで紹介（62）している。このようにヘボンの切断術は機も熟したところに行なわれた感が深い、田之助という当時の人気者がそれを受けたために世間の注目を集めたと思われる。

つぎにフォールズの制腐法の導入であるが Whitney はその著(6)につぎのように記している。In 1874, Dr. Faulds, of the Scotch Missionary Society, established the Tsukiji Hospital, where the Lister's antiseptic system and the treatment of fevers by the exclusive milk diet, were first introduced in Japan.

ところで一八六七年 Joseph Lister により発見された石炭酸殺菌法は、すでに翌六八年十一月、函館戦争において高松凌雲が用いており、フォールズが初めてではない。またここに記されている腸チフスの牛乳治療法についても、すでに記したように七〇年、シモンズが行なっている。

しかしヘボンの場合もフォールズの場合もかかる先駆があるとはいえ、なおかつその業績の意義が高いことは疑いのないことである。

三、ベリーの著二点

ベリーにつきの著がある。

亜墨利加教会法教医約翰別麗著 治驗録 兵庫病院 飾磨病院 一千八百七十三年春三月至一千八百七十四年秋七月
これは七四年十二月発行された和書であるが、文字どおりベリーの診療記録であって、七二年來日した彼が七三年春より始めた多聞通惠済院での経験をはじめ兵庫県病院、有馬、三田、姫路、加古川、明石などで経験した症例の代表的なものとその治療法について記したものである。この中に彼は七三年七月七日より翌年七月十八日までの兵庫県病院入院患者表を出している。すなわちこの間の入院患者二四六名の種属(性別)、年齢、産業(職業)、居処、病症、入院(月日)、出院(月日)、滞院日数、転帰について、一人一行づつに記したものである。これによればこの間の死亡は二二人、滞院日数(延)は六千二百四日であり、入院種別では上等十八人、中等七一人、下等一二二人、救助(救急)四五人である。

病名別で多いのは梅毒(四四)、胃病(一九)、脚氣(一三)、タイホイド(一二)、リウマチ(一〇)、金創(九)などである。なおこの間の外来患者数は一、六〇三人であったという。

本書で治療法を記してあるのは畢丸悪性症についての除畢術、角膜潰瘍、梅毒、痘瘡、虎列刺、齒痛などである。なお、患者飲食調理略、哺乳略則についても記している。

本書は旧佐伯理一郎蔵である。

岩治勇一氏蔵『教師投劑録』

岩治勇一氏より氏の蔵本の中にベリーが関係したと思われるものがあるといつてみせていただいたもので、表紙には『教師投劑録 Reep of master bales American』とある。本書は写本で筆者、年代、原本の有無など不明であるが、上記題名中 Reep は Recipe (処方) であり、bales とあるのを Berry と解したい。内容は各種疾病に対する処方であるが、これがベリーの在神時代(一八七二—七七)に著わされたものであろうことは本文中つぎの記載があるによって明らかである。「神田兵庫県令 三ヶ年来頑癰蔓延、ドノウエン氏沃謨砒汞水五匁、蒸水合八匁。食後直ニ用ユ、然ラザレバ胃ヲ刺戟シ痲衡ヲ發生スルノ恐アリ」神田県令とはベリーとも親しく、明治初年の兵庫県令であつた神田孝平(一八三〇—九八)のことである。なお頑癰は現在いう頑癰と同じものと思われ、ここには三人の処方が記してありいづれにもドノウエン氏沃謨砒汞水の飲用をすすめているが、この薬の性状については知らない。なお一名には水銀膏または炭酸石鹼の使用をすすめている。本書には一三七名のものの処方が記してあるが、その病類別数は以下である。篠虫(1)、角膜翳(1)、眼病(16)、網膜炎(1)、心臟病・脚氣(12)、打撲骨傷・外傷(9)、梅毒・腺病(13)、婦人諸病・子宮病(8)、胃病(15)、腦病・脊椎病(7)、肺病(8)、雜病(20)、窒扶斯・泰裴土(2)、痢病、下痢病(6)、癲癩(1)、淋病(3)、皮膚病(3)、小兒病(4)、蛔虫(2)、肝脾腎脾病(2)、喘息(2)、感冒(1)。胃病の一例のごときは第一日より十五日目までの病状を記して処方をおげている。また「教師云ク、紅彩癰着左法ヲ以テ治セサレハ手術ノ他ナシ」などの記載もあり、注射をすすめているものもある。またモルヒネ、ブランドー、牛乳、肉エキス、ジギタリス、肝油、ペプシン、テレピン油、蔓陀羅葉なども用いられている。

なお、本書については先年その一部を発表(66)した。本書をお貸し下さり、発表を許された岩治勇一氏に感謝する。

四、同志社病院英文年報にみる疾病統計

ベリーらが関係した同志社病院では一八八七年に第一回英文年報を出している。この中には疾病統計があるので、第一回をはじめ、筆者がみることできた、第二、第六、第七の英文年報について簡単に述べたい。第一年報では病院発足ま

もないこともあって入院患者は十六名しかない。うち七名が眼疾患であるのはベリーがこれを得意としたからであろう。

外来患者も十二疾患群にわけ八〇七名の患者を分類しているがうち二九六名までが眼疾患である。一般疾患で最大は消化不良の三一名である。この傾向は翌年の第二年報にもみられて入院患者七九名中三八名が眼疾患である。外来の一般疾患で多いのは消化不良、急性気管支炎、慢性胃炎、貧血、梅毒などである。九二年の第六年報ではこまかい統計はなく、入院二〇〇、外来二、一九九、で年間手術件数は一二三で、病類別ではやはり眼疾患が二九・一%と最多を占め、ついで消化器疾患の二二%となっている。なお、濃尾大地震の救護報告も載っているが、総取扱数、四八一、うち骨折四一である。九三年の第七年報では入院三四七中、眼疾患は五八とややその占める割合が低くなり、消化器疾患などの方が多くなっている。しかし外来は三、七四九名中眼疾患が一、三三七とやはり一位を占めている。同年の手術件数は二二四である。

五、テイラーの疾病統計

テイラーによる一八九一年の大阪医療報告が英文で出されている。主として長春病院で扱った患者統計で、口・鼻・咽喉疾患（以後疾患略）二一一、眼七一一、耳六八、脳脊髄二二九、胸二〇九、腹二六四、骨盤・泌尿生殖器四五三、骨・筋肉一二四、皮膚一一七、腫瘍・膿瘍七〇、一般・体質六五の計二、五三三名で、ここでもやはり眼疾患が多い。外科手術は三三七件。疾患として多いものは喉頭炎、中耳疾患、肺結核、消化不良、卵管・卵巣疾患などである。

これらの統計はその病院の特性も反映しているであろうが、ある程度当時の疾病構造をあらわしていると考えられる。当時のこのような統計は他にはあまりないと考えられるので貴重である。ミッシェンに職を奉ずるものとしてはやはりこういう報告を本部に出すことが必要であったのではないかと思われる。

なお、同志社病院英文年報の一、六、七、およびテイラーの報告はいずれも旧佐伯理一郎蔵である。

おわりに

一八五九年より開始されたわが国の新教（プロテスタント）の伝道は、宗教、文化の面で種々の影響を与えたが、宣教師

の中に宣教医といわれる一群の外人医師があつて、彼らはその高傑な人格と、近代医学の知識と技術をもつて、まだ西歐文化、医学の普及が不十分なわが国の民衆に直接接し、新しい医療を伝え、病者を助け、救療施設を造り、なおかつ酬いを求めることがなかった。

ことに開国当初はキリスト教の布教を禁止しており、世人のキリスト教に対する理解は不十分であつた関係もあつて、教団としても教育、医療などを主にした方針をとらざるを得なかつた。もつとも医療伝道はキリスト教弘布のさい一般に用いられる方法であつて、C. H. Robinson(11)はつぎのごとく述べている。

「医療伝道の目的は二つある。一は病人を治療することと、非キリスト教団において医療を知らないものを訓練して同国人の病人を救うことができるようにすること。二は伝道者と協力して神の憐みを説き、福音を聞こうとしないものの偏見を打ち破ること」

この目的を彼ら来日宣教医たちは、かなりの程度に達したといえよう。

一方わが国の医学の側からみれば、わが国の医学も早晩西洋医学をとり入れなければならないところにあつたが、国として積極的にそれに乗りだすだけの力は十分でなかつた。そこへ率先はいりこんできた宣教医たちの医学はわが国医学の西洋化の推進に役立つところ少なくなかつた。

筆者は開国以後、明治末年まで、わが国に渡来した宣教医について調査したところ、三九人を算することができた。

その最初は一八五九年十月来着のヘボンであり、開国期には他にシモンズ、シュミッドが来ており、(マッカーテもこの期に来日するも宣教医としてではない) 各々創始期の困難な時代の中にあつて先駆者的役割を果たした。もつともシモンズは来日翌年ミッシェンを離れているが、一医師としてわが国に残したところが多い。その後十年余は宣教医の来着なく、七年に至つてベリーの来着をみ、以後数年間には米国のみならず、カナダや英国などからも来日し、この期のものは聖バルナバ病院の創始者ラング、静岡病院にあつたマクドナルド、大阪の長春病院を中心に活躍したアダムスやテイラー、築地病院にあつて、かつ指紋学に貢献のあつたフォールズ、新潟の地に始めて医療伝道を行なつたパーム、教団に属さず

独自に病院を運営し、英文の日本医学史の著述で知られるホイットニーなど、宣教医としてももっとも充実した活躍を示した有能な人が集中して来日している。この時期は丁度キリスト教禁制が解かれた前後で、わが国のキリスト教史の上でも発展をみる時期であるが、宣教医の活躍もそれに比例していることは興味深い。八六年京都に同志社病院・京都看病婦学校ができ、ここにアメリカン・ボードの医師が集まり組織的な活動を行なうが、まもなく衰退したことは惜しまれる。教団として医療伝道に重きを置いたものに米国監督教会があげられ、ことに一九〇〇年来日したトイスラーの活躍は大であり、わが国の病院、看護、公衆衛生に新生面を開いた。

宣教医の来日後の動きをみるといわゆる医療伝道を忠実に実施し所期の成果をあげているものもあるが、他方医療か伝道のいずれかに比重が移り、どちらか一方をほとんど行なっていない場合がある。伝道を行なわぬときはシモンズのごとく教団辞任という形になる。

筆者の調査の範囲でわが国においてあまり医療を行なったことがないと思われるのに、ゴードン、ヘール、スカッダー、ランバスなどがある。もっともヘボンのように後年になって医療から手を引いたものもある。彼は一八七九年より医療をやめるが、これは彼の健康状態が悪くなったことにもよるが、わが国の医学が自立し、新しい教育を受けた医師がでてきたこともその理由の一だとし、八三年に行なわれた宣教師会議の席で「いまでは日本人の医師が多くなり、外人医師は押し出されているので、私の医療活動はさほど必要とはされない」と述べている。

従来わが国においても各方面から宣教医の研究が行なわれてきたが、まだ十分ではなく、ことに医学の面からは一部の宣教医の個人史を除きその研究は系統的になされていない。

筆者はまず宣教医のリスト作りから出発し、その個人伝を知ることにつとめたが、彼らのほとんどは従前の医学史からはもれている人物であり、その全容を知ることが容易ではなく、今後に残されているところが多い。さらにこの基礎作業を続けるとともに、宣教医の行なった医療の他に広い意味での医療伝道(救済事業、結核療養事業、児童保護・特殊教育事業、監獄改良事業、看護・助産事業など)にも論及し、これらがわが国医学、社会に占めた位置について考察を試みたいと

思う。

稿を終るにのぞみ、種々高教をいただいた諸先輩、なかんずく、重久篤太郎、中野操、阿知波五郎の諸先生に厚くお礼を申しあげます。なお勤務のかたわら研究を許された日本生命済生会付属日生病院長新海輝一、同皮膚泌尿器科部長細田寿郎の両先生に感謝します。本研究の一部は日本生命済生会の医学奨励金によったことを記し謝意を表します。

文 献

- (1) 阿知波五郎、明治初期英米系医学訳書原著とその性格、日本英学史研究会研究報告 第三七号 一九六五
- (2) 竹中勝男、本邦近世社会事業の先駆者としての宣教医、基督教研究 第十五卷 一、二号、一九三七
- (3) Russel L. Durgin, Paul S. Meyer: The Japan Christian Year Book, Supplement, 教文館、一九四三
- (4) 佐伯理一郎、幕末及明治に於けるアメリカ医師の活動に就いて、基督教研究 第二四卷 一号、一九五〇
- (5) 生江孝之、日本基督教社会事業史 教文館 一九三一
- (6) Frank Cary: The Japan Christian Year Book, 1959
- (7) Albert Arnold Bennett: Medical Mission Work, The Christian Movement in Japan, P 130~137, 1907
- (8) S. Heaslett: Christian Medical Work in Japan, The Christian Movement in the Japanese Empire including Korea and Formosa, p 253~212, 1917
- (9) Willis Norton Whitney: Notes on the History of Medical Progress, 1884
- (10) 海老沢有道、南蛮学統の研究、創文社 一九五八
- (11) Charles Henry Robinson: History of Christian Missions, Charles Scribner's Sons, 1915
- (12) J. G. Kerr: Medical Missions—At Home and Abroad—, A. L. Bancroft & Company, 1878
- (13) 気賀重躬、東亜基督教史、新光閣 一八四三
- (14) H・バルム著、丸川仁夫訳、支那と近代医学——支那医療伝道史——新生堂 一九四一
- (15) 中野操、中国に於けるアメリカ医師の活動、大阪医学雑誌 第三卷 十号、一九四八
- (16) 海老沢有道、維新変革期とキリスト教、新生社 一九六八
- (17) 金城清松、琉球の種痘、琉球史料研究会 一九六三

- (18) 森中章光、新島襄先生詳年譜、同志社校友会 一九五九
- (19) 仲泊良夫、医師仲地紀仁、大同印刷工業株式会社 一九六八
- (20) 重久篤太郎、日本近世英学史、教育図書株式会社 一九四一
- (21) 小沢三郎、日本プロテスタント史研究、東海大学出版会 一九六四
- (22) a W. E. Griffiths: *Hepburn of Japan and His Wife and Helpmates, The Westminister Press, 1913*
b 山本秀煌、新日本の開拓者ゼー・シー・ヘボン博士 漿芳閣 一九二六
c 高谷道男、ドクトル・ヘボン 牧野書店 一九五六
d 高谷道男、ヘボン 吉川弘文館 一九六一
e 佐々木満子他、J・C・ヘボン（近代文学研究叢書第十二巻）昭和女子大学光葉会 一九五九
f 大島蘭三郎、医学者としてのヘボン 医譚復刊号 一九五六
g 長門谷洋治、ヘボン からだの科学 第二七号 一九六九
- (23) 高谷道男編訳、ヘボン書簡集、岩波書店 一九五九
- (24) 高谷道男編訳、S・R・ブラウン書簡集 日本基督教図出版部 一九六五
- (25) 石橋長英・小川鼎三、お雇い外国人9 医学、鹿島出版会 一九六九
- (26) 鈴木要吾、松山棟庵伝 松山病院 一九四三
- (27) 福沢諭吉集（明治文学全集8）筑摩書房 一九六六
- (28) 永井保、高木兼寛伝、東京慈恵会医科大学創立八五年記念事業委員会 一九六五
- (29) *Spirit of Missions, Vol. 26, p 88, p 345, p 374, 1861*
- (30) 元田作之進、老監督ウイリアムス 一九二四
- (31) 石原謙 日本キリスト教史論 新教出版社 一九六七
- (32) *Medical Work, Fragments of Fifty Years 1869~1919, p 99~112*
- (33) 湯浅与三、基督にある自由を求めて——日本組合基督教会史——一九五八
- (34) 大久保利武 日本に於けるベリー翁 東京保護会 一九二九
- (53) Katherine Fiske Berry: *A Pioneer Doctor in Old Japan—The Story of John C. Berry—Fleming H. Revell Company, 1940.*
- (36) 守屋茂、近代岡山県社会事業史 岡山県社会事業史刊行会 一九六〇

- (37) 浜崎美景、岡山プロテスタント史、岡山伝道までの道——J・C・ペリーを中心に——我等、第一巻四号 一九六五、および我等 第八号 一九六八
- (38) 佐伯理一郎、京都看病婦学校五十年史 一九三六
- (39) 長門谷洋治、John C. Berry 研究序説、日本英学史研究会研究報告 第三二号 一九六五
- (40) 長門谷洋治、京都看病婦学校・同志社病院設立と廃止の事情、日本英学史研究会研究報告 第六一号 一九六六
- (41) 川村大膳、アメリカン・ボード日本布教報告書の研究 関西学院史学 五 五四—八八頁 一九五九
- (42) 川村大膳、アメリカン・ボード日本布教報告書の研究 関西学院大学共同研究 一 明治研究 一一—二二頁 一九六七
- (43) M. L. Gordon: An American Missionary in Japan, Houghton, Mifflin and Company, 1892
- M. L. Gordon: Thirty Eventful Years—The Story of the American Board's Mission in Japan 1869~1899—American Boards of Commissioners for Foreign Missions, 1901
- (44) 中山沃、岡山県病院の米人医師、ワイルス・テラー 岡山大学医学部同窓会雑誌 第三号 一九六五
- (45) Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, 1900
- (46) 長門谷洋治、新潟における外人宣教医、日本医史学雑誌 第十四巻一号 一九六八
- (47) 松平惟太郎、日本聖公会百年史 日本聖公会教務院文書局 一九五九
- (48) 中村徳吉、聖路加国際病院創設者 トイスラー小伝 聖路加国際病院 一九六八
- (49) 飯田宏、静岡英学史、講談社 一九六七
- (50) 重久篤太郎、お雇い外国人 5 教育・宗教、鹿島出版会 一九六八
- (51) 八十島信之助、指紋法の創始者——居留地の医師ヘンリー・フォールズ——日本医事新報一八〇九号 六〇—六一頁 一九五八
- (52) 蒲原宏、開花期新潟地方の伝道医師 セオバルド・エ・バーム先生のこと 日本医事新報一五八八号 三九四—二頁 一九五四
- 同補遺 一六〇二号 八九—九〇頁 一九五五 蒲原宏、バーム先生とその病院のことなど 郷土新潟 第八号 一九六六
- (53) 大島蘭三郎、近世医学史から (三九) 日本医事新報ジュニア版 第七〇号 一九六七
- (54) Proceedings of the General Conference of the Protestant Missionaries of Japan, R. Meiklejohn And Co., 1883
- (55) M. C. Whitney, Clara W. Kaji ドクトル・ホイットニーの思ひ出 基督教書類株式会社 一九三〇
- (56) 鮫島近二、ドクトル・ホイットニーを語る 眼科臨床医報 第十九巻 二二五頁 一九五五
- (57) 吉岡孝治郎、ドクトル Willis Norton Whitney 医学図書館第七巻 四五四頁 一九六〇
- (58) 児玉充次郎、紀州の聖者 ヘール師物語 ともしび社 一九五一

- (59) 大内三郎監修、J・B・ヘール著　ヘール日本伝道記　一八七七—一九〇二　大阪女学院　一九六九
- (60) 佐波亘編、植村正久と其の時代　教文館　一九三七
- (61) 山崎治夫　地の果てまで——ランバス博士の生涯——啓文社　一九六一
- (62) 岩治勇一　大野藩の洋学　一九六四
- (63) 長門谷洋治　初期来日宣教医研究序説　蘭学資料研究会報告　第一八七号　一九六六

(大阪市　日本生命済生会付属日生病院皮膚泌尿器科)

特別講演(Ⅱ)

ススルタ・サムヒータを訳して

鈴木 正 夫

Impressions During the Translation into Japanese of the Sushruta-Samhita from Its English Text.

MASAO SUZUKI

ススルタ・サムヒータ (Sushruta Samhita) はインドの古代医学 (Ayurveda) を今に伝える原典の一つである。すなわちこれと共に有名なチャラカ・サムヒータ (Charaka S.) とこれとは、ヴェーダ時代のアグニヴェシアの本儀書を、それぞれチャラカおよびススルタが補訂して作った本集 (Samhita) と伝えられる。近時インドにて別のベーラの本儀書が発見され、カルカッタにてサンスクリットで印刷されている由である。ススルタおよびチャラカ本集は古くより知られ、サンスクリット、ヒンドウ語等の版の他に、ラテン語には全訳されている。しかし近代欧洲語への翻訳は、十九世紀以来英独等の国にて企図されたが、いずれも途中にて中絶し、ススルタ本集としては演者の訳しつつあるものが、唯一の英語の全訳であり、チャラカの全英訳も第二次大戦後に始めてインドで発刊された。

演者の用いている原書は、Bhishagratna により一九〇七—一九一六年に、カルカッタにて発刊された三巻より成る英訳書である。千葉大学医学部の故伊東弥恵治教授は、第二次大戦前に東大文学部教授高楠順次郎博士より本書を譲り受けられ、多年研究の後その邦訳を企図された。かくして主に大戦下に努力を続けられて、昭和二十年五月にはその粗訳を完

成（第二巻は丸島敦氏担当）された。これの添削精撰の上出版のことは、故教授の畢生の悲願であつたが、それはほとんど果たされないで故教授は、昭和二六年にご発病、同三三年に卒去され、その訳稿は永く筐底に埋もれていた。昭和四三年春縁あつて私がその継承を頼まれて、補訳完成に力を注ぐこととなり、四四年夏第一巻を訳了、目下第二巻の終に近づいている。補訳とはいえ用字行文を現代人に親しくするために、ほとんど改訳に近い努力を要し、それに追われてヴェーダ哲学はもとより、インド古代医学そのものについて研究する余暇は全然なく、従つてこれについて論ずることはできないが、翻訳の筆を進めながら瞥見した同医学の一部をここに伝えたいと思う。

Āyurveda と Rīg-Veda を始めとする四つのヴェーダのうち、Atharva-Veda の一部を成す。四つのヴェーダの成立は BC 一一一一世紀とされるが、Atharva-Veda の成立はやや遅れ、BC 八—六世紀とされる。スルタ自身も BC 六世紀の人と伝えられるが、学問的には AD 二—三世紀の人とされている。チャラカ (AD 一—二世紀) が内科医であつたに対し、スルタは外科医であつたため、スルタ本集には外科的叙述が多いとされるが、一般の疾病も十分述べられている。

第一巻は解説六七頁、本文五七一頁であつて、全体が四六の章より成り、いわゆる決定的名句篇である。名句篇というのが訳文は散文であり、医学、医術の各般を掩う種々の主題の下に、その一般的叙述がなされている。

第二巻は解説一二頁、本文七六一頁で、次の四篇より成る。すなわち病理篇一六章、解剖生理篇一〇章、治療篇四〇章、毒物篇八章である。第三巻は本文四一五頁で、全巻六六の章を含む。いわゆる付録篇であつて、上中両巻の叙述の補遺をなし、伝説的には BC 六世紀のスルタの補訂に対し、AD 二世紀にナガルジュン（龍樹菩薩）の増補した部分が、これを成すとされる。

Āyurveda 医学の根底をなすのは Doshas の医学である。Dosha とは英訳書において、第一巻にてはこれを体液と訳し、第二巻以後では原語を用いている。これに Vāyu, Pitta, Kapha の三があり、これらも最初はそれぞれ風、胆汁、粘液と訳し、後は原語にして使っている。これらは別々の導管を通じて全身を流通していて、その完全な機能によつて身

体の正常の生理が保たれるとする。現代的に見れば Vāyu は神経作用に当り、Pitta は代謝作用、Kapha は鎮静作用に相当する。そしておのおの作用を営為した後に排泄物として、それぞれガス、胆汁、粘液に變成するとなすのであって、初め体液風、体液胆汁、体液粘液と訳されたのはそのためである。

この三つの Doshas の一いつの失調（悪化、激化、汚染、興奮その他の用語を、ほとんど同意義的に用いる）することが、種々の疾病の因をなし、それが鎮静または緩和されることが治癒をもたらすとする。失調して病因をなすことは、血液も同様である。また三つの Doshas と血液との四者は、種々の数と組合せによる複数で、失調の共同作用を起すことができ、病因の種類が増大する。三つの Doshas と血液は、正常機能においては導管が別々であるが、失調するなどの導管でも共通に流通することができる。種々の薬物（この医学においては薬物の数は非常に多い。豊富な生物界、殊に植物界を利用してである。）がそれぞれの薬作用を営むのは、この四者のいずれかを失調せしめたり、鎮静したりすることが根元をなすのである。

食物は消化されて乳糜となり、更に乳糜リンパ (Rasa) となる。この Rasa がまた非常に重要な身体要素であつて、これまた別の導管によって全身を流通し、至るところの部分で栄養し、保全する。Rasa—血液—肉—脂肪—骨—骨髓—精液の順に、順次変化してそれらを構成する。この七を身体の基礎的要素 (Dhātu) と称する。この上者より下者に変化する際に、まず未熟な下者が生じ、未熟な下者より熟成下者、未熟な次の下者、および排泄物を生ずる。この七段の未熟要素成生のときの排泄物に、尿、胆汁、粘液、発汗、毛その他のものが見られる。

人間は自意識ある有様個性として見られ、Purusha といふ。Purusha は魂と五大（地水火風空）とより成る。別に自我というものは Purusha と相対し、疾病に犯されるものは Purusha のみであるとなす。その人間の成立に当っては、Aryakta（未展開者）なる Prakriti（根本原質）が真の根原である。この未展開原質が Purusha の素因に胚胎されて、先ず Mahān（知的作用）を生じ、次にそれから Ahankāra（自我性）を生ずる。この Ahankāra の種々なる働きにより、一方に一一器官（五の感覚器官、五の行動器官および意^{manas}）を生じ、他方に五の Tarmātras（感能要素）（嗅味視触聴）より変容し

て五大（地水火風空）を生ずる。これらが Purusha 成立のための二四の範疇である。

Vāyu, Pitta, Kapha の三者は、いずれもその座や作用により五種ずつに分類される。Vāyu については Prāna-Vāyu（口腔を流通して食物を胃に送る）、Vdāna-Vāyu（上方に流通して言語や歌を司る）、Samāna-Vāyu（胃腸内を流通して Rasa 運搬、筋運動を司る）、Apāna Vāyu（腸の下部を流通して尿性を司る）の五であり、Pitta については Pāchakāgni（消化火、胃腸間にあり、食物消化、尿尿排出、体温保持をなす）、Ranjakāgni（染色火、肝臓脾臓部にあり、Rasa を血液にする）、Sādhakāgni（作業火、心臓部にあり、欲望を遂行させる）、Alochakāgni（視火、瞳孔にあり、視像を捕える）、Bhājakāgni（照明火、皮膚にあり、塗布薬を吸収し、容色を輝かす）の五である。また Kapha については Kledakam（胃中にあり、食物を糜汁にする）、Avalamvaka（胸部にあり、腕、胸、頸部の関節、心臓を保護する）、Vodhakam（咽喉、口蓋基部にあり、舌を潤おし味覚を助ける）、Tarpakam（頭部にあり、諸感覺器を冷却する）、Shimeshakam（関節内にあり、運動を円滑にする）の五である。

解剖学的所見は相当に細かい。實際死体を水中にて分解せしめ、七日後に草の毛や刷毛にて細かく観察する方法が述べられていて、事実に基づいて学を導く要を説いている。例えば皮膚を七層に分け、米粒の二〇分の一を長さの単位にとっている。骨、靱帯、筋肉、脈管等は、四肢、体幹、鎖骨以上の各部に分けて数を挙げ、全身の数を算えている。靱帯には若干神経が算入されているかも知れない。筋肉については乳房、性器関係にて女子特有のものを二〇挙げている。脈管、導管いずれも臍部に始原すると見ているが、新生児の所見に基づいているのであろう。脈管には Vāyu, Pitta, Kapha 血液のものを別々に算える。導管 (Dhamanis) には動脈、神経の訳も付し、この二者を混一して取扱っていると思われる。また Marmas（生命部分、急所）なる概念があり、筋肉、脈管、靱帯（神経）等が複雑に混在して、手術に際して危険な場所を意味する。上肢、下肢、胸部、腹部、背部、頸部以上の各領域に数を算え、一々名を付して全身に一〇七個所存在する。その傷害の危険に従い五種に分類しているが、外科を主とするススルタにて適わしいと思われる。

會長講演

糖尿病による視力障害についての史的考察

鈴木宣民

Historical Survey on the Visual Disturbance Due to Diabetes Mellitus, in Particular About the Effect of the Li Tong-yuan's Prescriptions for the Diabetic Retinopathy

YOSHITAMI SUZUKI

糖尿病の歴史は極めて古くその起源は不明とされておる、而して糖尿病による視力障害についても既に古代から知られておると言うが明らかな記載は無い。Groenouwによれば糖尿病に視力障害と失明の来ることを最初に記載したのは Renaudin (一八一四) であり、糖尿病による白内障を初めて記載したのは Berndt (一八三四) である (Graefe-Saemisch の眼科全書による)、一八五一年 Helmholtz によつて検眼鏡が発明されて間もなく、即ち一八五六年ウィーンの人 Jäger が初めて糖尿病による網膜の病変を記載した。以来糖尿病と眼との関係はとみに一般の注目をひくところとなつておる。

他方、支那医学については糖尿病は消渴の中の一つとして既に漢の時代(二世紀頃)の医書に詳細な記載を見ることが出来るが、糖尿病による視力障害を最初に記載したのは元代の人李東垣(一二五一年歿)であり、西欧の記載より遙かに早い、即ち彼の著とされておる蘭室秘蔵(彼の門人である羅天益の序文によれば至元十三年、一二七六年の出版である)に消渴の治法として挙げた処方集の中の一つに当帰潤燥湯があるが、その中に「消渴大便閉澀乾燥結硬し兼て温飲を喜み陰頭短縮し舌燥口乾眼澁し開き難く及び黒処に於て浮雲を見るを治す」と視力障害についての記載がある。ここに眼澁し以下の症状

は霧視又は羞明の如きものと解され、又黒処以下の文章は即ち瞳孔領に見える水晶体の薄い混濁を指したものと解され、要するにこれらの記載は初発白内障の際に見られる症状と考えるのが最も妥当であろう。勿論これが直ちに糖尿病による白内障と考えることは出来ない。更に又今日特に注目されておる糖尿病性網膜症の如きものも否定は出来ない。その何れと断定は差しひかえるべきであるが、白内障にしても又、網膜症にしても、糖尿病に比較的長間に亘って罹患した者に見られるところであるから、本処方是要するに年令的には高令者であり、糖尿病に罹患してかなりの年月を経た患者に使用されたものと解される。何れにしても右の記載は糖尿病による視力障害についての世界最古の文献と見るべきであり、この一事を以ってしても李東垣こそは稀に見る卓越した臨床医家であったと思われる。尚、陰頭短縮は即ちインポテンツを指したものと思われ、これも糖尿病患者には屢々言われておるところでこの記載も興味深いところである。

終りに前記李氏の処方から約十種類の漢薬を撰び、これを今回糖尿病性網膜症の十数例に使用した成績について述べる。

一般演題

「千金要方」の研究（第一報）

大塚 恭 男

初唐の人、孫思邈の著書「千金要方」は、現存する中国最古の医学全書として、その医史学的意義は極めて大きい。演者は昨年の本学会総会において「千金要方に関する二三の問題点」と題する口演を行なったが、その後に検索した問題点を指摘して御批判を仰ぎたいと思う。「第一報」としたのは、今後も当分同書の研究を続けるという意味以上のものではない。

前回、「千金要方」の成立を、AD 六五〇（永徽元年）—六五九（顕慶四年）と推定したが、これは既に宮下三郎氏が、昭和三年に報告されたところである。

ところが最近、同書の細字部分、つまり注記を調べているうちに、その成立時期に関連する興味ある事実を発見した。同書の注は、宋の林億等が校訂に際して、諸家の説を参照して、方論の異同を弁じたものであること、その凡例にみえる通りである。しかし、これらの中に少数ながら、校訂者の筆と考え難いものがある。例えば、「卷七風毒脚氣湯液第二」中に「若腫已消仍有此候者急服此湯方神驗」及び「茱萸湯治脚氣入腹悶欲死腹脹方神驗」の二条があるのがそれである。

その理由の一つは、林億等の注は方又は論が他の医籍又は異本のそれと出入がある場合に限って記されているのであって、右の

場合のように単に「蘇長史方神驗」乃至「蘇長史方」と記した例がほかにないことと、いま一つは、「神驗」の二字を記すことは校訂者としては越権行為であって、著者以外の口吻ではあり得ないということである。蘇長史は蘇敬であり、顕慶四年「新修本草」上呈時に長史の官にあった。蘇敬が長史の官にいたった時期がわかれば、「千金要方」の成立の時期は更にしぼられることになる。「新修本草」中に「千金方」の引用があるが、この「千金方」が、隋志の記す范世英の「千金方」のような同名異書である可能性は既に岡西為人氏が指摘している。この点に関して若干の考察を行なった。

（横浜市大医学部薬理）

明治初期漢洋脚氣病院設立の裏面史について

矢 数 道 明

「天下の事、古有って今無きことあり、今有って古無きことあり」といわれているが、脚氣は史上欧州にはなく、東アジアにのみ多く、中国では隋の病源候論（六一〇）に脚氣の症状を記載し、日本においては、大同類聚方（八〇八）に阿之乃介、枕草子や源氏物語（一九〇四）などにもあし、のけと称し、日本後記（八四二）に藤原朝臣緒嗣の上奏文中に初めて脚氣の文字が用いられているという。

わが国では元禄年間以後（一六八八）、都市に住む王候貴顕に多

発し、將軍家茂も脚氣衝心により率去し、幕末より明治初期に至っては上下を問わず猖獗をきわめ、陸海軍隊に大流行をみるに及んで重大な問題となった。本病の原因について和漢さまざまな説があったが、元文五年（一七四〇）大阪の医師林一鳥は「腫病弁」を著し、早くも米食（白）を禁じ、麦、大豆、小豆食を奨励した。後述の遠田澄庵もこれを厳守させた。本病の実体が解明された近年は、脚氣ははや潜在性のもののみをみるだけで、古あって今なき病となった。

明治11年7月10日、内務省は神田表神保町英語学校跡に、漢洋脚氣治療仮病院を設け、洋医側より佐々木東洋、小林恒、漢方側より遠田澄庵、今村了庵を選んで治療に当らしめ、明細な報告書を提出させた。その年12月本郷弥生町に新築移転したが、遠田澄庵は家伝の秘方と称して処方の方公開を拒み、社会的信用を失い、明治15年7月病院は閉鎖された。

この脚氣病院設置の直接の動機は、恰も明治天皇の脚氣治療に伺候せんと企てた澄庵の脚氣家伝薬の正体を搜らんとした長与専斎の計画であったという、当時の事務長長谷川泰所蔵の資料に基いた山口梧郎著、長谷川泰先生小伝にその裏面史が詳記されている。この裏面史の信憑性を、長与専斎の松香私志とを対比しつつ、その前後の事情を考察してみたい。

（東京医大藥理）

帆足万里の「医学啓蒙」について

小川 鼎 三

豊後日出藩の碩学帆足万里（一七七八—一八五二）の医学思想については安西安周（昭和十八年）、帆足図南次（昭和四十一年）などの研究があり、今さら贅言を要しないようである。彼は儒者としては独立派とよばれる位置にあり、教育者・政治家・勤王愛国者・蘭学者・医学者・理化学および数学研究者を兼ねて、実に博学達識の偉大な学者であった。

彼の著「医学啓蒙」全一冊は嘉永三年大坂の脩文堂が刊行した。その序文に当る「発題」が十四枚を占め、本文は三十五枚である。後に大正の末年出版の「帆足万里先生全集」の上巻に収録されている。万里は二年後の嘉永五年六月に七十五歳で歿したので、この本は晩年の作であり、目刈の西嶋精舎で書いたものと思う。

発題の冒頭の文によって文化十年か十一年ごろ賀来佐之が彼の塾に入門して間もなく佐之の父賀来泰庵（三浦梅園の門人）が歿したので、万里は愛弟子に医学を教える必要に迫られて、その方面の研究をはじめたとある。「此時蘭書ハ田舎ニハ解体新書ト内科選要ノ半分ハカリ上木シテ有リシ比也」という、宇田川玄直の「西説内科撰要」全十八巻の第十五巻までは寛政五年に出版されたが、あと三巻は刊行がずっと遅れたようである。「半分ハカリ」は分量の上ではやや不正確だが理解できる。

賀来に続いて日野鼎哉、ついで坂本周行も万里に医学講義をうけることとなった。この三人は後に長崎にゆき勉強した。特に賀

来と日野はシーボルトに学び大いに医名をあげた。ところが三人とも蘭方かぶれになり、漢蘭折衷を断固として主張する万里と衝突した。賀来は師の意見を奉じて純粹蘭方を止めたが、日野と坂本は改正せず、弘化四年万里が上洛したとき、この二人と激論した。坂本はやっと改正したが、間もなく病死した。死の直前に坂本は「余蘭方ノ為ニ死ス」といったと聞くし、「日野生ハ轆轤不遇ニシテ療治モ止メタリトキケリ」とある。鼎哉はこの「発題」が書かれた嘉永三年九月より三カ月ほど前にすでに歿したのを万里はまだ知らないようである。

本文では吉益(東洞)、村井(琴山)がしばしば槍玉にあげられ、漢方も古方だけでなく、後世方にも良い所がある。「今ノ医者ハ宜ク漢蘭医法ヲ兼学テ外感転変ノ病ハ漢方ヲ用ヒ内傷一部ノ病ハ西法ヲ用ユ可キ也」とあくまで採長補短の折衷説をつよく主張している。

(順天堂大学客員教授)

ポンペの脚気論並麻疹説

大 滝 紀 雄

私は横浜市大医学部図書館に保存されている甫謨百氏脚気論並麻疹説を見たので、これについて報告する。五十三頁からなる写本である。

「脚気論」は一八五八年、すなわちポンペ来日の翌年、彼が出

島で講義したものを、一八六一年臼杵の宮川有俣朗が翻訳したものである。脚気はすでに鎌倉時代から存在したが、正体不明のまま適切な治療法がなかった。明治に至り詳細な研究がなされた事は衆知の事実である。

「麻疹」の項は三部に分れ、第一部の「麻疹略説」はポンペの口授であり、第二部の「麻疹」は佐藤尚中の訳である。第三部の「麻疹治説」は文久二年当時の麻疹治療法が記されている。富士川游の「日本疾病史」によると、麻疹の流行は九九八年(長徳四年)以来一八六二年(文久二年)に至るまでに三十八回の流行が記録されている。文久二年の流行は、前回の文政七年及び天保七年の流行が軽症であったのに反して、かなり劇症であったらしい。ポンペがことさらに麻疹の講義をしたのは、この流行をみたためであろう。また山崎文庫に収められている。松本良順の筆記になる百朋の幾里仁義と一部は一致している。

麻疹といふ脚気といふ当時は臨牀的に重大な疾患であった。

私は右の写本について、多少の考察を加えてみたいと思う。

(横浜市 開業)

岡山地方の種痘と適塾門人守屋庸庵

中 山 沃・石田 純朗

嘉永三年正月、緒方洪庵は足守藩主木下利恭の命をうけて帰国、足守に除痘館を設け、門人守屋庸庵等の協力で種痘を行った。そ

のはか他領の帯江、早島、撫川でも接種し、正月下旬から三月までおよそ千五百人に達した。同年三月門人達は種痘心得書を印刷しこれを配布した。同年二月備前藩家老日置氏の侍医難波抱節は足守に赴き痘苗の分与をうけ、彼の居住地金川を中心に種痘を行い、二月から四月まで三千余人にのぼった。同年二月邸洪川の引痘略を訳し訳引痘略と名づけ、また同年五月には「散花新書」を刊行、さらにゴールドシュミットの牛痘新書の一部の訳述を「三痘安危弁」(一枚物)として印刷配布した。美作津山地方においては、嘉永三年二月津山藩医野上氏は同じく緒方洪庵より痘苗をゆづりうけ、種痘勸奨の刷物を配布、藩内で広く接種した。この時岡山を中心とした備前地方では種痘が行われた記録は現在のとこる見出されていない。

津山地方では一時痘苗は絶えたが安政七年三月大坂除痘館から再び牛痘を入手することができ、前記野上氏等の藩医達によって接種された。岡山においては慶応二年、藩主の子女および領民に種痘が行われた。

上述の足守の除痘館で活躍した守屋庸庵は、適塾門人石原朴平その人で、足守藩士石原官平の次男で備中浅口郡西原村庄屋友太郎の養子となり、友太郎の娘斐野をめとった。父官平は緒方洪庵の母キャウの姉の子で、洪庵の従兄である。天保二年生、弘化四年十月適塾入門、嘉永五年八月紀州華岡塾に入門した。のち養父の邸内に住み医を開業した。後年児島郡下津井字吹上に転じ、明治四十二年十月二十二日七十九歳で歿した。如竹と号し画に巧であった。洪庵と親交があったので、洪庵からの書翰が沢山あったが、子孫が多くの人に分与したので、現在三通だけが残されている。

る。前記の種痘に関する種々の印刷物と洪庵の書翰、庸庵の画等を紹介する。

(岡山大医学部生理)

ベルツと日本学校衛生

杉浦 守邦

一八八〇—一九〇年代の日本教育界は、明治初年拙速にかつ無秩序に欧米の教育制度を移植したことによる矛盾が各所に現われ、ことに学生の健康破綻を招いたことに對する反省が、澎湃としておこった。このとき東京医学校の内科兼生理学の教師であったベルツは、当時の文部省主脳部から重用せられ、学校衛生の分野に多くの貢献を残した。

(1) 日本人種早熟説が教育制度改革の一動機となる

ベルツは一八八三(明一六)年ドイツ東亜自然科学民族学協会報告集に有名な「日本人の身体的特徴—人類学的研究」を発表したが、その中で日本人は早熟な人種であると結論した。

このことは教育関係者に大きな関心をよび、早熟・早老な国民に対して現行の教育制度(就学年齢を六歳とし、大学卒業までの就学期間がドイツよりも長い)は不適當であって、早急に改革の必要があるとの世論を喚起し、文部大臣井上毅・久保田譲らが積極的にこれを手がけることとなった。しかし実現は二度の戦争で遅れ、結局実施をみたのは大正期にはいつてからのことである。

- (2) 日本人学生不健康論が、体育及び学校衛生の勃興をもたらす

一八九三（明二六）年文部大臣に就任した井上毅は、ベルツの教育上の見解に大いに傾聴する所があったが、特に日本人学生が負担過重のため勉学に没頭し不健康に陥っているとの彼の指摘に大いに驚かされ、各校長会議、知事会議等で数々このことを説諭したが、また日本で最初の「体育及び学校衛生に関する訓令（体育運動の徹底、筒袖の奨励、禁煙、試験制度の改善、学課負担の軽減、徒歩通学の推奨等）」を発して、教職員や学務官吏にこれの実行を指示するに至った。学校衛生がわが国で法制的にその位置を獲得したのは、このときからといつてよい。

- (3) 剣術・季術の学校体育への利用に関して生理学的見地からの検討を促す

一八八三（明一六）年文部省では、従来の剣術・柔術を学校体育へ採用することの利害得失について、体操伝習所に調査を命じたが、ベルツはスクリバ・三宅秀らと委員を嘱託され、生理学的見地からこれを検討して、最終的には学校の正課としては不適当との答申を行なった。

彼自身は剣術・柔術の身体練成におよぼす効果を認めながら、その非合理性・精神主義的な面には批判的であつて、この結論はその後明治期に何回も再燃した剣・柔術採用要求運動に対する文部省の一貫した拒否姿勢となつて踏襲された。しかしこれが逆に、従来の武術を合理主義の立場から再検討する気運を喚起し、最も早くそれに成功した講道館柔道の普及発達をもたらし因となつた。

- (4) 文部省学校衛生顧問として学校衛生制度の建設に参画す

一八九六（明二九）年、彼の東京大学時代の教え子であつた三嶋通良が文部省学校衛生主事になるや、学校衛生制度建設の最高諮問機関として学校衛生顧問会議が設けられたが、ベルツはこれに三宅秀、緒方正規、後藤新平、長谷川泰らと共に参画して、就学年齢の確定、学校伝染病予防規則・学校身体検査規則・学校医設置規則等現在も残る根本規則の制定にあたって、重要な役割を演じた。

- (5) 女体体育を奨励する

ベルツは日本人女子の体位が劣弱で、そのため乳幼児死亡率も高いこと（特に上流家庭で）を指摘し、一貫して女子体育の奨励に力を尽した。

（山形大教育学部）

フィシスと陰陽

三 木 栄

内部環境 *Milieu intérieur* の恒常性は、自由生命の本質的条件である。この理は Cl. Bernard によって実証へ導かれたもので、W. B. Cannon の説く恒常性保持機構 *Homeostasis* も同じ概念である。これらの理は、近時生体内の微細構造並びに機能（分子生物学的追求）が明らかにするにつれ、生存・生命を説く基本理法となされるに至つた。これには外部環境ともいふべき春夏秋冬の変わり、寒暑湿燥・風雪雨露、有毒物・病原微生物の侵襲、はた

また我々を取りまく社会的事情（経済の変動・飢饉・戦争による侵害）などの身心への影響もある。この外部環境を制御し内部環境が宜しきを得れば、健康である。平衡が破らるれば疾病となる。これにうまく対処することが医療の根本理法と考えられる。この根本理法を東西から徴し、諸賢の一考を得たいのである。

紀元前四一五世紀に Hippokrates の説く *phōs* (natura, 自然、造化、自然良能、自然治癒力、physician はこれから発す) なるものは、生命保持の本質であり医療の理法である。そして配するに外因として、空気・水・土地（場所）の影響を説いている。疾病とはこの内部の機序が平衡を破ぶられることによって起こり、治療とは平衡を調えることである。とするのである。これは Hippokrates 医学の中核であり、別に彼の「集録」中に見らる衆知の血液・粘液・黄胆汁・黒胆汁の四体液説の如きものは、病理説を組立てるための方法として採り入れたもの、従属説である（中国での五行説に比定される）と私は考える。

翻つて東においては、戦国時代（Hippokrates と略ぼ同時代）に成立したと認められる「黄帝素問」の主論である『陰陽応象大論』には、陰陽者、天下道也、万物之綱紀、變化之父母、生殺之本始、神明之府也、治療必求本、と記す。この陰陽（陽中有陰・陰中有陽）なるものは、中国自然哲学の根本理法を医学に適用したのであるが、Hippokrates のフィシスと同じく、今言う恒常性保持機構、生体を維持する基本的な理と軌を一にするものと認められる。そしてまた『四氣調神大論』には、春夏秋冬の四氣の人体に及ぼす影響を説く。これも Hippokrates の空気・水・土地なる環境に当たると考えられる。さてまた、元末期の大医で養陰説

を以て知られる朱震亨の『陽常有余・陰常不足』これも体内部機構の平衡の重要性を述べ、彼の陰とは体内に存する生氣（内部環境）を指し、これを養い調えるのが治病の本である、と説いたものと思われる。

要するに、生命また健康の原理は組立てに精疎はあるが、本源においては古今東西同じ、と言い得るのではないであろうか。

（堺市 開業）

藤井方亭に関する研究

一特に諏訪俊に関する新資料について

津田進三

藤井方亭（名は俊、字は士徳、瓊陵及び酔蘭と号す）は安永七年（1778）四月廿八日勢州菴芸郡野田村の医周朗の長子に生れ、寛政七年頃江戸に出て宇田川玄随に学んで帰郷したが、文化元年再び江戸にて旧師の養嗣玄真に従った。文化二年二月「医範提綱釈義」に諏訪俊の名で、また同五年三月「医範提綱内象銅版図」には藤井俊の名で夫々題言又は凡例を書いたが、その文化五年十二月と翌六年九月との二回玄真と共に金沢に赴いて前藩主の治療に当った。同じ六年に玄真の後継として養子縁組までなしたが、十二月廿八日加賀藩医となり江戸巢鴨の藩邸に住した。ついで八年十月蘭書翻譯御用も兼務したが、藩候一族の治療に忙殺せられ、文政五年「増補重訂内科撰要」に九編の増訳を行い、また藩医大

高元哲の「泰西雷説」を校訂した外は、「内科備要」、「医宗擊要」など数種の訳書をみるのみである。弘化元年十月退隠し、翌二年(1845)八月八日六十八歳を以て本郷の藩邸に病没し、唯念寺に葬られた。(法名瓊岡院釈龜淵樂易居士) 門人には加賀藩以外にも飯沼慾齋、佐野柿園、山田猫巖及び吉雄忠次郎らが知られている。

以上は主として故藤井亭巳氏の超人的御努力により判明した方亭の略伝であるが、このうち最も重要且興味深い事項は諏訪俊に關する事であらう。故藤井氏は「柿園文鈔」中に「……作医範提綱筆記」とある事により、諏訪俊は架空の人物と考証せられたが、このたび藤井方亭が当時諏訪氏を称していた事を証する新資料をみる事が出来た。それは高岡の医逸見飢齋に宛てた東条琴台の書簡(元治元年十二月一日付)であって、その一節に「……方亭は定て御承知に可有之 医範提綱校定之頃は諏訪氏にて其後本姓に復し候 其師宇田川榛齋は小生壮年之頃応接候人にて 先人の執友槐園之男なり」(逸見飢齋伝「大正十三年刊」と記されている。本資料により藤井方亭と諏訪俊とが同一人物なる事を更に一層確實ならしめたものと考える次第である。

(金沢市 開業)

パラメディカル教育史の一面

(明治初期の看護婦教育)

柴田幸雄

一昨年の本学会以来、衛生検査技師教育の現況ならびにその由来について考察してきた。(日本医史学雑誌、第一四巻第一号五一頁、昭和四三年、同志社女子大学学術研究年報、第二〇巻、一四〇頁、昭和四四年) 今回は、これと関連した看護婦教育について、明治一九年開設された同志社における看護婦学校(当時これは看病婦学校とよばれている)の状況を追求し、主として教育カリキュラムの面から考求し、明治初期の看護婦教育の一面を眺めてみたい。最近パラメディカル教育の重要性がさげられ、いろいろな面からの検討がなされている。(医療をになう人たち、谷みゆき、三一書房、昭和四四年。看護近代史、富岡次郎、医学書院、昭和四一年) 又同志社病院ならびに京都看病婦学校のことに關しては、すでに長門谷氏によって、くわしくしらべられている。(日本英学史研究会研究報告、第六一号、昭和四一年、同志社時報、二三号、昭和四一年) 私は最近同志社一〇〇年史刊行にたいする史料彙報をみる機会を得たので、その二、三の点について所見をのべることにする。一、京都同志社病院規則のなかにしるされたレジデント医(現在アメリカにおけるレジデントとはいささかその様子がことなり、インターン生との関連性がみられる)外来患者当直医(現在の無給副手問題と関係がある)看病婦それぞれの職務章程。二、京都看病婦学校規則にしるされた教育課程。三、同志社病院附属看病婦学校口演にみられる当時の海外看病婦学校の様子。四、看病婦学校卒業生の唯一生存者であった岡本老のさんのことについて。(ヨブの如く、百二歳、岡本老の、岡本さかき、カルチュアクリエートサービス、昭四四、三、一〇、日本の近代看護創生期の人びと、高橋政子、看護学雑誌、第三二巻第九

号)

なお岡本老の様は本年一月おなくなりになった、心から岡本様の御冥福をお願いいたします。

(同志社女子大学家政学部 栄養生理)

コス島のヒポクラテス財団の現況

蒲 原 宏

ギリシャのコス島に建設されることになっている、ヒポクラテス財団の殿堂建築状況が実際にどのような状態であるかを知るために一九六九年九月二十九日に同島を訪れた。

ヒポクラテス財団の殿堂は同島コス市の背後にある山の中腹に建設されつつあるが、いまだ完成に至っていない。

九月二十七日に上棟式が行なわれ、ようやく外廓だけが出来上がったところである。

敷地の整備もほとんど行なわれていないが、殿堂までに至る自動車道路は大略完成している。

コス市から四キロ余の丘陵上にあるが、ちょうど同島のアスクレピオス神殿廃墟の山つづきとなっており、ところに位置している。内装工事はいまだ全く取かかれていない状態で完成まではまだ可成りの日時を要するものと思われる。

同島で発掘されたというヒポクラテス像はコス市の中心にある博物館におさめられてあるが、これをヒポクラテス財団の殿堂に

移すかどうかはいまだ決定していない。

全世界の医師からの募金状況は香しくないもので、日本からの積極的な追加募金を希望されている。

財団の本部はアテネにあるのであるが、通信網が完備していないので同島との連絡があまり良く行っていないようである。

現状のスライド供覧によって詳細を説明する。

(県立ガンセンター新潟病院)

外科手術無菌法の開拓者テリオン

古 川 明

外科消毒法の発見者として、リスターの名声は千古不滅のものとされている。しかしながら、その後の無菌法の発見によって、リスターの石炭酸噴霧による滅菌法は、すでに過去のものとなった。

外科無菌法はバストゥールの着想(一八七八)によるものであるが、フランスの外科医テリオン Octave Roche Simon Terrillon (1844—1895) によって、一八八三年ごろから実施にうつされた。かれは一八九二年に、その結果を発表し、一般に実用化されるようになった。その著書はシャブユ Chaput との共著で、*Asepsie et Antiseptic Chirurgical* の題名である。

テリオンは一八七三年にパリ大学を卒業し、外科学を専攻した。一八七八年より教授として、パリの病院で、多くの後進を指導し

た。無菌法のほか、泌尿生殖器、婦人科、整形外科にわたる多くの業績もあげている。かれは不運にも、手術中に自分の眼にとびこんだ膿から感染し、膿毒症にかかり、五一歳の若さで死去した。

消毒法の開拓者として、ゼンメルワイスやリストアがひろく知られているのに、テリヨンの名があまり知られていないことは残念である。当時無菌法はバストウールの示唆によって、当然生まれるべき状況にあったので、テリヨンに次いで、ドイツのベルグマン Bergmann、米国のハルステッド Halsted が実施し、急速に世界中にひろまった。そのために、テリヨンの名がとくにとりあげられなかったであろう。

フランスは一九五七年に、テリヨンの肖像切手を発行し、外科無菌法の発見者として、その功績をたたえ、これを世界に誇っている。切手には肖像のほかに滅菌器、顕微鏡、外科器械が添えられ、無菌法の発見者 Créateur de l'asepsie と記されている。

(東京都 篠原病院)

坪井信道の日習堂塾平面図

青木 一郎(岐阜県) 中野 操(大阪市)

大正二年十月川本幸民の嗣子清一が深川冬木町の坪井信道邸の平面図を自筆で製図したものが残っている。その複写を配布し簡単に説明をくわえたい。

加賀藩の人体解剖学模型

酒 井 恒

黒川良安が長崎で購入した人体模型は、全身模型(男)一、後腹壁骨盤(女)一、頭頸部一、側頭骨聴覚器一、眼窩内容一、喉頭気管一、脳一、心臓二と考えられる。構造は精巧、(一部金属支柱)紙及び植物性線維よりなり、分解組立可能で、解組の難解な部分にはの記号を付し、留金により解組に便ならしめてある。各部に径五ミリメートル円形の番号札、又は矩形の番号札を付し、学名表(存否不詳)との照合を容易にし、或はフランス語学名印刷の小紙片が貼付されている。全身模型は触手厳禁のため、製造年代は不詳、身長約一七〇センチメートルである。気管模型にのみ年号と思われる1863(？は塗装が剥がれ、判読不能)がペン書きされている。他に同時購入といわれる脳(針金製)一がある。全身模型以外のものについての特別な史料は不詳であるが、黒川良安先祖由緒中にある「製造人体」とは、前記模型の総称である。一般には「ギン・ストレーキ」と呼ばれたが、後、金子治郎により「ギン・ストレーキ」と誤り伝えられ、この呼称は後には全身模型のみを意味する様になったと考えられる。

購入は藩命によるもので、万延元年との説もあるが、加賀藩種痘所の開設が文久二年であり、それ以前は津田淳三らの私立種痘所であったことより、この説は誤りであり、黒川良安先祖由緒はかにみられる明治二年が正しいと思われる。加賀藩到来は黒川良安が明治元年七月二十九日金沢出發、長崎で製造人体の伝習、購

入の後、明治二年五月帰藩、同二十二日任務を完了している。価格是不詳であるが、黒川良安が長崎に持参した金額は黄金三万両であったといわれる。

その後、全身模型は明治十五年に補修され、明治後期までは学生に解組示説されたが、いつの頃からか医学部・標本庫に保存される様になった。全身模型以外のものの補修は不詳であるが、現在もお講義、実習時にしばしば解組示説されている。(模型の一部供覧)

(金沢大学解剖学)

『眼科新書』中の「眼球略図」をめぐる

片桐 一男

杉田立卿の訳述した『眼科新書』は文化十二年(一八一五)に上梓された。しかし、附載された眼球解図十一枚のうち最後の一枚に不備を見付けて、急き挿しかえて翌十三年に出版しなおした。立卿の請いにより十一枚の「眼球略図」を描き与えた画家は、当時模写図の制作において、蘭学者から信望を集めていた石川大浪その人である。

立卿が訳述の底本としたのは Joseph Jacob Plenck が著し、Martinus Pruijs が蘭訳した Verhandelng over de Oogziekten, Rotterdam. 1787. である。しかしこの蘭訳本には一枚の解剖図も見えない。さらに、もとのラテン語版にも見えない。

杉田立卿の識語によれば、「眼球一雙を求めて、以て躬ら解剖し、且つ諸れを大浪公に請ひて、側より随て其の真を写し、而して毫も爽うことなき者也」と明記しているから、実地解剖を即座にスケッチしたものと思われる。ことに第八図には「蒲桃膜を展開し顕微鏡を以て其の裡面を視る」とも明記している。せいぜい一・五倍ほどの弱拡大の図であるから、拡大鏡程度のものによる観察であるが、図そのものはかなり正確と思われる。

なお、立卿の識語中「眼球之図、泰西之書もとより之を載す」という一句も気にかかる。すなわち、参考した文献なしともいえない。事実、第一図、第三図などはヘーステルの外科書に附載する図に通じるものがある。

したがって、ブレンクの原書には参考とする図を得ることはできなかったが、その他の輸入原書を参考にして、なおかつ実物を解剖して観察したところを、模写図制作に腕のある洋風画家石川大浪に描いてもらったものと見なされる。

なお各図の正確性や参考図について博雅の示教が得らるれば幸いである。

(文部省)

「蝦夷地異疾考」と壊血病

松木 明知

ロシアの東方進出に対抗して、蝦夷地を警衛防備するため、江

戸幕府は寛政十一年知内以来を直轄地として公収し、東北諸藩に命じて分轄統治せしめた。

さらに文化元年からはエトロフ、クナシリ、宗谷などのいわゆる奥蝦夷地にも越冬し警備することになったが、越冬戍兵の多くが翌年の春に至って正体不明の疾病のため陣歿したため各藩は勿論のこと江戸幕府も予防対策に苦慮した。演者はすでに本症がビタミンCの欠乏に拠る壊血病であり、またこれを招くほど新鮮な野菜その他の食品に乏しいため栄養不良状態に陥ったものと診定したが、今回は多発した壊血病に対して江戸幕府の医師達がどのような態度を取ったかを多紀元簡の記すところの「蝦夷地異疾考」から紹介し、併せて松前及び東北諸藩の医師達の対策、さらには大槻玄沢ら蘭医達の治療方針と比較検討を加えた。

「蝦夷地異疾考」は東京大学附属図書館の土井鶚軒文庫の所蔵である。

(弘前大学医学部麻酔科)

比較語学的方法による身体意識史検討の

試み (二)

三 輪 卓 爾

さきの本総会で、語族の異なる諸国語について、単語(語原など)、成句・俚諺などを主材料として比較考察することが、民族による身体意識ないし臓器觀念の歴史的由来を探るための有用なアプローチ

1チの一つでありうることを論じ、こうした検討は臨床家として心身症等を扱う上でも、また民族としての自己認識といった一般的課題の上からも意味のあることであろう、とのべた。

その際の例としてまず最初に旋毛(ヒビ・Harvirbel)を中心として取り上げたのは、多くの西欧語と対照的に、日本語では成句・俚諺などが多く、極端に方言量も多いにかかわらず、このものが身体部分として生理的機能を欠くといつてよい点で、考察を単純化できると考えたからであった。

今回は、語族の相異なる近隣諸民族や西欧諸国民のあいだで、臓器意識・觀念の上でやはり顕著な差があると認められ、しかも旋毛の場合とちがって、りっぱに生理機能を有する骨髓・脳などを中心にして考察する。日本語と比較の目的で利用するのは主としてアイヌ語・漢語・西欧諸語である。

体表部分は別として個別的な身体部分の語彙に乏しかった大和言葉の中に、脳・骨髓を意味する「(はねの)なづき」の語が存在する事実には演者は多大の興味をそそられるものである。

(東京女子医大・三和銀行東京診療所)

明治時代の鉦夫共済組合病院

三 浦 豊 彦

すでに明治二十年代に紡績会社は救済会、共済会、職工病傷共済会、職工病傷保険などの名称で、職工の生命病傷を相互に救済

する制度が出来ていた。救済の種類には疾病治療及扶助、負傷治療及扶助、負傷者賑恤、死亡者賑恤、病傷者解備扶助などがあげられる。傷病の救済のためには会社が医務所及病室を設置するのが普通であった。

ここで紹介するのは恐らく共済組合病院としては日本で最初のものである。第七十回日本医史学会総会で徳川時代の生野鉾山の煙毒について報告した、この生野鉾山は徳川時代は幕府の天領であったが、明治になって御料局生野支庁になった。この生野支庁の技長、工博大島道太郎はドイツに範をとって御料局生野支庁職夫共済組合をつくった。明治二十五年（一八九二）一月のことである。

佐藤英太郎は生野の開業医であったが、明治二十五年以来囑託されて組合医という名称で、自宅診療所で診療を行った。しかし不便なので明治二十六年（一八九三）十月から鉾山に組合の医務所を開いている。

明治二十九年（一八九六）に佐渡、生野両鉾山が三菱に払い下げられた。経営はかわったが鉾夫共済組合は継続し、会社もこれを保護している。明治三十年（一八九七）に生野鉾山ではかなりりっぱな共済組合病院をもった。佐藤英太郎を院長とし、医員三名、薬剤師一名、調剤生二名あわせて八名の構成だった。

「本組合ハ生野鉾山公済組合ト名ケ鉾主及鉾夫ノ釀金ヲ以テ鉾業条例第七十二条ノ定ムル補助及其他ノ患難ヲ相互救済スルヲ以テ目的トシ」最初の十年間は鉾主が鉾夫出金総額と同じ額を出金している。佐藤英太郎は明治三十一年（一八九八）に東京医事新誌に二回にわたって鉾夫共済組合のことを紹介している。さもないと何も伝わらなかったと思われる。

（労働科学研究所）

愛知県病院教師ヨングハンスについて

中 野 操

明治六年五月から同九年四月まで愛知県病院教師として医育治療につくしたアメリカ医師ヨングハンス（一説ではドイツ医師ともいい、また別にヨングハン・ヨムハン、沃武華などとよばれた。）については「名古屋大学医学部九十年史」にかなりくわしく出ているが、なお不詳な点が少くない。家蔵の写本「診察御日記」は明治四年一月十八日卒去した鍋島閑叟（旧佐賀藩主）にかかると診療録であるが、それを見るとヨングハンスは名古屋赴任前東京築地の居留地に住み、明治三年秋ボードイン帰国のおとをうけて閑叟の診療にあたっている。それらのことをのべてヨングハンス伝の補遺としたい。

（大阪市 開業）

アグノーの著書について

大 矢 全 節

最近医学の各分科が細かく分れて、それぞれの分科で精密な研究が行われて医学の進歩に貢献して来たが、また余り細かな分科に分れ過ぎて横の連絡が失われる弊害も現われて来た。

そんな意味でアグノーの著書について考えて見ることにした。

Haguenot, Henri アグノーは一六八七年一月二六日に医師の長男として生れ、一七一五年にモンペリエ大学の教授に推挙されて、多くの著書を著したが、その中に *Tractatus de Morbis Capitis externi*, 1751, Avenione がある。この著書は眼科、耳鼻科、口腔科の各科の横のつらなりを捕えてこれらの各科を一括して、外部頭部の疾病として論評を加えている所に吾々の興味と示唆を汲みとることが出来る。

もう一つ吾々の関心を惹くことがある。著者がホテル・ディユ・サン・エロアの常任委員をしていた関係から、一七七五年一二月一日に享年八八歳の天寿を全くして易實した際、おびたしい彼の蒐集した図書類を全部同ホテル・ディユ病院に寄附して後進の研究のために役立てたことである。

著者の遣した著書の主なるものには、なお次のものがあって高く評価されている。

腸管の運動に関する研究、一七一三、モンペリエ版

梅毒の水銀塗擦療法、一七三四、モンペリエ版

教会における埋葬の衛生上の危険について、一七四八、モンペリエ版

物理、医学および博物学に関する雑纂一七七一、アビニオン版
狂犬病に関する知見、モンペリエ大学紀要に収録

以上、これらの著書から、著者は巾の広い学者であつたこと

が判る。特に腸管の運動に関する研究においては、試験動物を用い、実験生理学の端緒を開いたものといえよう。

(国立京都病院)

酒場(ささゆ)の行事記録からみた阿波藩主(蜂須賀家)とその家族の疫史的考察

福島 義一

古来、わが国医事風俗行事の中に、酒湯(ささゆ)或は一三日目の初湯(はつゆ)と呼んだものがある。この風俗を現代医学の立場から考察すると、天然痘、麻疹、その他、之れに類似する発疹性熱性疾患に罹患して、生命危機の病時期を離脱したよるこびの儀式といふことが出来よう。この風俗は、藩制時代を通じて、全国広く行われ、当時の特権階級であつた藩主やその家族たちの間では、甚だ重視した行事であつた様である。演者は、藩制時代阿波藩の統治者であつた蜂須賀家を中心とした代表的歴史年表「阿波年表秘録」(中山茂純撰著弘化二年一八四五)を調査して、上記酒湯の行事が克明に記録されている事実を知り、之れに拠つて、歴代(但し、十三代まで)藩主とその家族間にこの種疾患が何ういう様態をもつて浸入し、伝染して行つたかを考察した結果について述べる。尚お、本藩の歴代藩主の寿命についても言及したい。

(徳島市 開業)

江戸時代の精神病学書としての一本堂

一行余医言巻五

山田 光胤

一本堂は、香川修庵の号であって、一本堂行余医言は修庵の著作になる、全十五巻の書で、江戸時代に著された大部の医書としては最も初期のものである。

本書の内容は、非観血系医学の万般にわたるもので、いわば當時の医学全書である。

このうちの巻五は「癩・驚・癲」の部で、精神疾患と一部の神経疾患をあつかったものである。

一本堂の精神病学論は、中国古典を根拠にしなが、自己の経験観察によって得たと思われるオリジナルが多く、江戸後期に著された精神病学専門の書が、この一本堂の論を引用していると考えられる点がある。

参考

これらの病者が表わす現象についての観察は、かなりくわしく正確であって、現今の精神医学とくらべても、精密ではないまでも、誤りがきわめて少ないのは、興味深いものがある。

(東京郡 開業)

小石 元信 江戸十人二十六年(号)

大塚 藏

此本良タリハ法論で更に深められ

医学教育史について

阿知波 五郎

プールハーヴェで代表できるライデン大学の時代までは、その大学が多分にストヂュム・ゼネラーレ(全ヨーロッパ的大学)の性格をもち、そして學術用語としてラテン語が使われた。この性格は、また多分にキリスト教的であり、ラテン語で象徴できる宗教的な制約があった。

医学の歴史を顧みると、何か新しい医学運動が起るたびごとに「ヒポクラテス回帰」や「古方復帰」が問題となっている。医学の原点に、非常に素朴で幼稚ではあるが、正しい医学の姿なり、精神があることを意味している。

プールハーヴェもそうであったが、ヨーロッパの十八世紀までの医学教育史の大部分は、スコラ化したガレノスやアビセンナの医学と、経験と実験の医学との相克史である。すなわち、「ヒポクラテス回帰」運動史である。

日本のヨーロッパ医学の受容は、はじめ、蘭学の形でなされた。そして、その受容のし方は、ヨーロッパの中世以来のスコラ的医学とヒューマニストたちの相克が、まさに終らんとした、つまり近代化の緒についた医学を、そのまま、成果的に受容したものである。したがって一部の蘭学者を除いて、これらの相克の経緯を知っていた人は少い。蘭学期にヒポクラテス画像が多く流布したのに、ガレノスやアヴィセンナの画像を見ないのは、そのためである。蘭学期の漢蘭折衷家の宿命的なヨーロッパ医学の理解度の

不足は、一般に蘭学の実学的性格から説明されるが、以上の経緯を知らないことも関係がある。十八世紀以後のスコラの医学を克復した成果のみを受容した、この蘭学的性格は、日本以外では、アメリカとロシアの医学教育史においても同じである。そして、この三者のヨーロッパの医学学校の創立は、一七六五年前後（この時代のわが国では、吉雄塾があった）である。

これら三国の共通な点は、ガレノスやアビセナを歴史的段階で一応、その偉大さを認め、そしてスコラ化するアリストテレス的医学としてのガレノスやアビセナを、再び歴史的段階で見きわめ、つぎにヨーロッパのヒュ머니ストらの、これとのはげしい争いを再認識する。そういう過程をへる歴史的認識、これを仮りに医学の人文科学の面とするならば、明治前の医学の性格の中には、この医学の人文科学の面の欠除が大きい。同じようにアメリカも、ロシアも共に、ヨーロッパ医学受容初期には、書誌学的に見て、この面の欠除が証明できる。

このように成果主義的な蘭学が、実学的性格を帯びるにいたったことは当然である。しかし、思想的訳本（主として写本として流布）や、山脇東洋以下の解剖の実施、伏屋素狄らの実験の諸事実は、中国の欽定訳業とちがった市民的訳業を背景に、前述の人文科学面の前提に生まれたものである。

現代のアメリカやソビエットの医学教育の産学協同的性格は、その国の社会的性格によるものであって、そのはじめの成果の受容の性格の「伝統」だとはいわない。しかし、この人文科学面の欠除、あるいは、非歴史的観点からものを見ようとする思考方法、この事は相当これに触れる問題だと思う。

現代の日本ほど医学の歴史が軽視されている時代も少い。歴史は、過去の実践の跡であり、反省や批判の正しいデータである。人文科学面の欠除は、医学が病人という人間を対象とする学問である以上、人間疎外になる惧れがある。

医学教育史を調べる機会に恵まれ、重要なテーマである大学の「伝統」の中にふくまれる歴史的観点のあるなしの問題にふれてみた。これは医学史の本質にもふれることであるので、ここに批判を仰ぎたい。

（京都市 開業）

蘭学事始への大槻玄沢の寄与

緒 方 富 雄

杉田玄白（一七三三—一八一七）の「蘭学事始」がまとまったのは、文化十二年四月（一八一五）であるが、玄白は、草稿ができた段階で門人の大槻玄沢（一七五七—一八二七）にわたして、よいように訂正し、繕写するようにたのんだ。このことは、事始のおわりに書いてあるし、玄沢がその責をはたしたことは、蘭東事始と題する写本のいくつかに見られる玄沢の序文に書かれている。

玄沢は玄白の草稿のどこを補訂したかは、具体的には指摘できないが、玄沢が事始よりまえに書いたものに、ほとんど同じ内容の記述の部分が見出される。

玄沢は、自著の序説、例言等をしばしばきわめてくわしく書いた人で、そこで、蘭学発達史が断片的に述べられたものがすくなくない。そのうち事始よりまえに書かれたもの、たとえば「蘭学階梯」(一七八三年稿、一七八八年刊)の上巻中「裨益」「精詳」「摹効」「興学」「立成」の各節には、事始と共通の内容の記述がすくなくない。これらは、玄白が事始を書くときの参考になったかもしれない。玄沢がその一部をおぎなったかもしれない。「瘍医新書」(寛政二年三月(一七九〇)の序あり)の「序」や「例言」にも、随所に関係ある文章がある。

玄沢の「蘭訳梯航」は、最後に文化十三年四月(一八一六)の日付があるから、事始完成の翌年の作であるが、この問答体の記述にもられた内容は「玄沢の事始」といいいいほどゆたかで、これほどの知識を持った玄沢が、玄白の事始の補足に寄与したところが大きかったにちがいないと推測される。玄沢が逆に玄白の事始からの引用したのではない証拠に玄沢の記述は具体的でくわしい。

わたくしは、事始の完成にあたっての玄沢の寄与のほかに、完成後の事始にたいして、補遺的な寄与の功の大きかったことをあらためて認識したい。現に古写本中には、玄沢の補注を引き写したものがあって、玄沢が直接に事始の補遺をおこたらなかったことが知られる。

(緒方医学化学研究所)

西域医薬の東漸史考

吉田一郎

前二世紀の末葉、中国では折から漢の武帝が西域に勢力伸長の雄図を実行に修した。

この頃から漸く文物の交易を目的とする通商路(後世にいうシルクロード=Silk Road)を通じて各種宗教や軍兵の伝波と共に、遠く西方諸地方から将来された各種物資のうち、特に医薬関係のものの研究を試みようとする。

この問題は極めて広漠としたものではあるが、それだけに演者は年来これに無限の興味を感じるもので、各般の文献や現代にまで辛うじて残存する幾多の資料に依って、これが整理を企てつつある。

先づ薬物約三十数種を挙げて、これらの本態や渡来年代・連関の事物及応用範囲を検討しようとするものである。

(深谷市 開業)

室町・戦国時代における曲直瀬道三の

史料考証

今市正義

曲直瀬道三正盛について、その医学的な業績は論じ尽された感

蘭学階梯の序言に玄白の序文
私蘭医事問答の序文
解
蘭学新書の序文
今市正義

がある。道三が、医家として活躍した時代に輩出した人名を、成書の活字が誤り伝えて、著者の意に反したまま、今日に及んだと考えるのが妥当であろう。

矢数道明博士は、昭和四十四年九月六日に発行された「日本医事新報」に、道三の今時点における史料に拠る限り知られる生没年（永正四年（一五〇四年）文禄三年（一五九三年）より、細川惣領家勝元（一四三〇（一四三三）明五年）の知遇をうけたとは、年次の差よりありえないとし、むしろ細川晴元である、と考証される。まことに、そのとおりである。

演者は、細川氏研究において史学界に令名のある後藤捷一先生を、地方史研究の恩師とし、また南北朝以来の細川一族の動勢について造詣の深い国学院大学助教授小川信先生に、細川氏とその家臣団の盛衰を調べるため、たえずご示教をうけている。この発表は、矢数博士によって示された、ご高説の所産である。

細川晴元は、阿波・讃岐・三河の守護職で、俗に阿波屋形と云いならされている阿波細川氏、讃岐守成之の次男義春を祖父とし、その長男澄元の子である。澄元は、細川惣領家の勝元の後継である政元に迎えられて養子となったが、おなじ養子の澄之・高国と家督を争い、高国に破れて再挙をはかるうちに病死。

晴元は、父澄元を追った細川高国が自殺後、阿波より迎えられて惣領家を継いだ。

それは、道三が田代三喜に会って學術を習得する機縁を得た、享祿四年（一五三一）である。そして十四年後の天文十四年（一五四五）道三は還俗して医家となっている。

富士川游博士の名著「日本医学史綱要」にある三好修理は、永

祿三年（一五六〇）正月、將軍義輝の相伴衆になり修理大夫に任ぜられた、阿波細川氏の家宰三好長慶を指しており、また松永正は、この年二月、彈正少弼になった三好の家臣松永久秀である。演者は、道三の薬方が、細川惣領家の重臣新開氏に伝わっていたことを、石原明博士のご考証で知り、かつて発表した。この発表は、毛利元就の発病と道三の陣中診療について、知見を述べようとする。

（高知県安芸市森沢病院放射線科）

享保十五年の製剤記録

赤松金芳

享保十五年庚戌の製剤記録によると、紫雪（黄金、寒水石、磁石、石膏、滑石、羚羊角屑、犀角屑、木香、沈香、丁香、玄参、升麻、甘草、朴消、芒消、辰砂、麝香の製剤）が「和剂局方」により、碧雪（朴消、芒消、馬牙消、消石、石膏、寒水石、甘草、青黛の製剤）が「本草綱目」により、また玄明粉（朴消、甘草の製剤）が「本草綱目」、「本草蒙筌」によって製造され、その他、「東医宝鑑」による瓊玉膏、「保産機要」による回生丹、「本草綱目」による地黄煎なども製剤されている。これらの製剤に当たっての責任者として『浦上弥五左衛門殿御懸り、小笠原石見守殿御見廻り』と記載されている。

（京浜女子大教授）

川本幸民の化学書についての一考察

宗 田 一

1

明治七年は陸軍文庫蔵版として刊行された川本幸民の『化学読本』は、幸民が万延元年（一八六〇）に訳した『化学新書』の訳稿の改題であるという志賀富士男（科学史研究Ⅱ、昭一七）の説が踏襲されて今日におよんでいる（小沢清躬、蘭学者川本幸民、田中実、明治前物理化学史など）。

また『化学新書』は同じく幸民の『化学書』の増訂改題であるという志賀の説もそのまま採用されている。

演者は、わが国における『化学』の名称の由来を考察する上に、前記幸民の諸訳書は重要な位置を占めるので、若干の考察を試み、志賀の説の誤りを指摘する。

2

『化学読本』の序文（陸軍少佐木村信卿）によれば、本書の原書は Gunning の *Leerboek der Scheikund* の第二版で、前編は無機化学篇（非金属篇一八六五年、金属篇一八六四年刊）、後篇は有機化学篇一八六六年刊である。

一方、『化学新書』の原書は現存訳稿のタイトルページから J. W. Gunning の *de Scheikunde van het onbewerkte en bewerkte rijk* (J. A. Stockhard : Die Schule de Chemie の蘭訳) であり、欄外の注記から、幸民はこの書の第二版（一八五〇年）を万延元年に訳し、翌文久元年冬に第三版（一八五五年）

を得て増補訳したことが知れる。従って、両書は同じ Gunning の訳書ではあるが原書は異なる。

3

坪井信良の記す幸民の記述書目中に『化学書』の名があり、『化学読本』と同書但シ初版ノ訳ニシテ第二版ヲ補訳挿入ス」とある。この点を志賀が誤解し、『化学書』が『化学新書』以前の書名だとし、万延元年以前の安政年間に幸民が『化学』の名を用いている点を強調した。

しかし、万延元年十月ごろまで幸民が化学の名を用いていないことは武谷棧亭宛の書簡によって窺われる。だから、幸民が『化学』の名を採用したのはこれ以降だと推定される。

中国における化学の名称の使用は『六合叢談』（咸豊七年、一八五七より刊行）にすでにみえることが坂出祥仲氏によって最近指摘されており、その和刻本刊行に幸民が関与しているらしいので、化学の名は中国の影響によったものと考えられる。

（大阪大学医学部医学概論）

陶 齋 雑 録（河口信順）

川 島 恂 二

「陶齋雑録」は、河口信順こと陶齋が、文化十一年から記した雑記帳である。表紙に「釣月堂」と誌るしてあるので、当時の自宅書齋をこう呼称したものと思われる。

河口家は代々土井藩の御側医勤めの蘭方医であって、中の一人

信任は、「解屍編」著者で有名である。信順は信任の孫に当り、

寛政五年十二月二十一日（一七九三）古河に生れ、幼名熊之助、

後の名を信順、字は壯也、号して祐卿、陶齋（とくさい）と称し、明治二年三

月二十二日（一八六九）古河に歿し享年七十七歳。

父の信且は文化九年十二月二十三日（一八一二）五十四歳で病歿したので、翌文化十年二月十七日に跡式十五人扶持となる。此頃から信順は二十一歳で一家の大黒柱となった為に医業を本式に勉強する要に迫られたので、文化十二年四月に、杉田玄白之入門許可願いを藩に提出し、許されて、同年五月廿六日に入門した。即ち天真楼に入塾し文化十四年七月廿五日に医を修めて古河に帰落した。

玄白は文化十四年四月十七日（一八一七）に歿したので、信順は正に玄白八十三歳から八十五歳の三年間をよき孫弟子として御相手を勤めた訳で、其間玄白から教わった人生哲学的雑学、世評などもこの「陶齋雑録」に沢山メモした。例えば漢詞の平仄を合わせるとしても、玄白は細かい規則に縛られるより、気分ですみ、作詩してよいと教えた。信順は元来若くして漢詩の素養が高かったので、玄白の漢詩のよい相手であり聞き手であつたらしく、それで、信順は玄白から八十五歳筆の「医事不如自然」清曠楼之賦（長詩）「等の五幅を拝受出来たものと思う（筆者発見）。玄白先生の最晩年の人間模様は、この陶齋雑録を通して、よく眼の辺りに彷彿とする。

筆者は、昭和四十一年八月九日河口家文書調査中に、その雑録をも発見出来たので、今回、その内容の概略を発表するものであ

る。

（古河市 開業）

仏像・仏画における Babinski の足ゆび

現象

豊倉 康夫

抄録未着

（東京大学教授）

小林桃鳩著「蘭方枢機」について

大鳥 蘭三郎

「蘭方枢機」の原書が W. Buchan の “Domestic Medicine” であることはすでに述べた。今回は「蘭方枢機」訳出の底本となった “Domestic Medicine” の蘭訳本 “Huislyke Geneeskunde” と「蘭方枢機」との両者を内容的のことを主として比較検討してみたい。

まず「蘭方枢機」であるが、表題頁のつぎに文化十四年（一八一七）の年記のある丹波頼理の序文が漢文で三頁にわたって記さ

れ、続いて池田冬蔵が文化十三年に漢文で記した題言が十五頁、十項目にわたって載せてある。目次頁がこれに続き、巻一には熱病総論にはじまる二十一篇を、巻二には卒中にはじまる二十三篇を、巻三には不食にはじまる二十五篇を、巻四には婦人科九篇、小児科十三篇、外科九篇、癰毒六篇、整骨科九篇を、巻五は薬剤篇と制劑録とを収めてあることが記されている。

本文がこれに続き、句読点つきの漢文で概して簡単に記され、終りに岡美の後序と藤林紀元の跋がのせてある。

これに対し“Huislyke Geneskunde”は表題頁のつぎに蘭訳者 J. E. Lyklama à Nyhoet の序文を六頁にわたってのせ、続いて著者自身の序文を十頁にわたって掲げている。本文にはいる前に十三頁に及ぶ序章を置き、本文は巻末に記されてある目次によれば二部門に大別されている。第一部門は病氣の原因を論じ、九篇に分けて述べている。各篇はさらにいくつかの章に分かれている。第二部門は病氣についての説明で、四十二篇、一附録に分かれている。

これ著の両書を一見比較してすぐ分かることは、「蘭方枢機」は“Huislyke Geneskunde”を訳出したものであることは誤りではないにせよ、かなり省略されている。右に挙げたところだけからしても原書にある蘭訳者、著者の序文、序章は「蘭方枢機」では省かれ、また原書の本文の第一部門は「蘭方枢機」では全く省略されていることがわかる。

(慶応大学教授)

温室経疏にみられる医学思想

杉田 暉 道

温室経疏は唐の紀国寺慧浄の著である。この元本の仏説温室洗浴衆僧経は、宇井伯寿博士によれば、中国の三国時代の竺法護の訳出したものであるという。竺法護は月支の出身者の家を出で、敦煌に生まれ、八歳にして出家し、西域に学んだのち、長安から洛陽に出て二六六—三〇八年の間經典の翻訳および仏教の教化につくした。その訳経は、般若經、法華經、維摩經、無量壽經その他多数に及び、重要な北方仏教（大乘仏教）の教典は一応出つくした観がある。

本經疏の概略を述べると、名医の晋婆が、修行している僧のために、温浴を供養することを仏に請うて赦されるのである。ついで、洗浴の法を仏が説かれる。それは、七物（燃火、淨水、澡豆、酥膏、淳灰、楊枝、內衣）を用いて、七医（四大、風病、湿痺、寒水、熱氣、垢穢、身体輕便、眼目精明）を除去し、七福報を得るのである。最後に温浴の功德が二十の頌に分けて詳しく述べられている。

このようにみていくと、洗浴法およびその機能の考え方は、かなり合理的なものであったと思われる。また本經の成立場所が宇井博士らによれば中央アジアあたりではないかといわれているが、数ある經典の中で、温浴について、本經ほど詳しく述べられているものがないこと、中央アジアの地理の風土を考慮すれば、僧侶の供養する方法の一つとして、洗浴があげられても、おかしくは

ないということもい得るのではなからうか。ただし、この経典が、中国に伝来されて、どの程度実際にこれが行なわれたのか明らかではない。

(横浜市大医学部公衆衛生学)

銅人と石経

石 原 明

中国医学の重要な分野である針灸医術の基準となる経穴(ツボ)は、古くは「明堂経」によって伝えられてきたが、これを実証に基いて具体的に表現する試みが、新の王莽によって天鳳三年(一六)になされた。王は政治犯の死罪の人を医官にまかせて生体解剖をさせ、その知見をもとにブロンズ製の標準人体模型を作ったと「漢書」に記されている。これがいわゆる『銅人』の初見であるが、宋代の天聖五年(一〇二七)に及んで仁宗が医官の王惟一に命じ銅人二体を鑄造させたことは、中国医学史上画期的な事業といえよう。

宋代における銅人は医師国家試験のための教材の目的で作られ、体表には経穴の部位に小孔を穿ち、内腔には皮袋に水銀を満たしておさめてある。常時はこれを中央の医育施設である太医院の傍ら、医祖を祀る三皇廟の前に置き、別に解説として治平年間英宗の勅撰に係る王惟一撰の「銅人腧穴針灸図経」を刻した石碑四面を配し、これを一般公開して医学の基準を示した。これが『石経』

である。

銅人と石経はこうして宋代医学の重要な基礎資料であったから、銅人はのちに宋と金が和議を結ぶ時(靖康の難)条件の一つとして引渡しを要求されたほど重大な存在であった。

宋に始まった銅人の制は、金元の異民族国家にも踏襲されて補修も行なわれ(ネパール人が参加した)、明代には何体も再鑄され(その一体は日本に現存)、石経も磨滅が甚だしいので正統八年(一四四三)に再建された。

幸いにも銅人と石経拓本はわが国に明代のものが現存しているので、中国中世の医育の一端を知る資料として注目に価する。

現在、東京国立博物館にある銅人は、明の国定像の模写と思われる、幕府医学館旧蔵。

実測値は身長五尺三寸、頭圍一尺八寸八分、頸圍一尺二寸二分、胸圍二尺九寸四分、眼裂一寸三分、口裂二寸、手(肩峯より中指端)二尺六寸四分あり、ほぼ中肉中背の成人男子の等身大の像である。

正統石経の原拓は帖仕立に改められ、一は宮内庁書陵部(幕府医学館旧蔵)に、一は名古屋の蓬左文庫(尾州家旧蔵)に存する。中国では原碑の残片が陸増祥の蔵を経て陳蒙安の所有となったが、現在は存する所を知らない。

「銅人腧穴針灸図経」は石経と別に、淳熙十三年(一一八六)に上木され、そのレプリントは数版あるが、石経本文とかなり差があるといわれている。

要するに銅人と石経は、中国中世の医育を解明する重要な資料であり、現存資料に基いて再検討を行なうべき価値を有する。

大槻玄沢の産科書について

酒 井 シ ヅ

大槻玄沢の産科関係の著作として従来知られていたものは「怪病啓蒙」と「改正新訳奇胎的説」である。これらは文化元年(一八〇四)に子宮外妊娠について記した上下編というべきものである。この原文は漢文であるが、この大部分の読み下し文が巴陵宜祐著「産婦人科の歴史」に所載されている。「怪病啓蒙」は玄沢宛に婦人の一奇症について何人からか問ひ合せ、あるいは知らせて来たもののまとめである。これには玄沢もその原因を知ることのできないままその場の間に合せで答えていたところ、宇田川玄真よりいわゆる子宮外妊娠について述べている蘭書を見せられ、

巨範提綱

たちどころに疑問が氷解したので、「改正新訳奇胎的説」と題して紹介している。この二書の他に、演者は玄沢の「九畹摘要」と「妊娠弁分男女法」を見つけたのでその内容を紹介する。

前者の表紙には、桂川甫周先生、九畹摘要 蒲蘭翻訳 妊娠弁男女法雙胎重胎説 とあり、巻末に寛政三年亥辛仲秋 大槻磐水翻訳、桂川甫周選とある。

本文はバレーの医事集成から訳したものとなっている。先ず、胎児の男女を推測する方法を述べ、次いで重胎説が述べられている。ここでは双生児の発生の機序にふれ、ガレヌス、アリストテレス、

ヒポクラテス、ブルニウス、フロカネシア、ラウセットの説が少しづつ引用されている。文章はすべて書き下し文である。この重胎説と全く同じものが奥劣齋の「産科内術」にあるため、緒方正清著「日本産科学史」の中で劣齋のものとして紹介されている。しかし、これは玄沢のものにちがいない。というのは「妊娠弁分男女法」は漢文で書かれているが、内容は前者とほぼ一致する。ただ、前者にない玄沢の見解や追考が加わっている。内容は現在から見れば全く臆説をでていないが、玄沢は東洋のものに比べ、事実に則した説だと驚歎している。

(順天堂大学 医史学)

ギブス包帯技術の日本への輸入について

蒲 原 宏

マタイセンのギブス包帯法をはじめて日本に紹介したのはボンベ・ファン・メーデルフォルトであるが、マタイセンの名が明かに出てくるのはマンスフェルトの繃帯書の方法である。しかし石膏が骨折治療に使用されるということを松崎慊堂が慊堂日曆の中ですでに述べているが、これはマタイセン式の方法ではないようである。

柏原学而が慶応三年に「祗而斯繃帯書」を訳出しているが、この原本が何であったか、いまだ明確にすることができない。しかしマタイセン式のギブス包帯法臨床例の記載は、ミュレル

によって行なわれたことが、東校医院版「治験録」巻二（明治六年）に収載されているのが最初のようなのである。

その後ギプス包帯法紹介は、外科拾要（明治六年）外科説約（明治八年）陸軍病院扶卒須知（明治八年）外科通論（明治九年）などの刊行書によって外科技術の一部として行なわれ、整骨説略（明治七年）でも一部紹介されていたが、西南戦役の骨折患者の手術例では施用には効果を得ることができなかったと、大阪陸軍臨時病院報告摘要（明治十一年）で述べられている。

佐藤進・外科各論（明治十三—十六年）では結核性脊椎炎への適応が論及され、骨折、脱臼以外の疾患への応用が一般化されはじめる。

石黒忠恵、片山国嘉によるエスマルヒの軍陣外科（明治十六年）の翻譯によって最も系統的な紹介が行なわれるが、山崎元修、石黒宇宙治訳「朱氏外科通論」（明治十七年）に至ると、現今のギプス包帯法とほとんど変わらないところに達している。

ギプス包帯法も明治十六年（一八八三）頃には大略わが国において定着した医療技術となることができるところまでの医学知識となつて受容られていたと考えたい。我国におけるギプス包帯技術定着までの変遷について論及したい。

（県立ガンセンター新潟病院）

明治前における北海道・青森の狂犬病史

（紙上発表）

松木 明知

1 狂犬病はウイルスを原因とする主として中枢神経系を冒す伝染病であり、人畜共通の伝染病の中で最も恐ろしいものである。

日本において、往時から狂犬病が存在することは知られており、⁽¹⁾古くは「医心方」にも「獺犬嗜人」の項があると言われている。

しかし本症が大流行を来たして人々の注目を集める様になったのは江戸時代中期に至ってからであるという。明治前の狂犬病の疫史に関する報告はほとんどない。筆者は北海道、青森における本症の疫史について調査し⁽²⁾、三の新知見を得たので報告する。

なお史料中に見られる「犬の病」がすべて「狂犬病」であるとは直ちに診断出来ないが、大流行を来たしており、人以外に牛、馬、狼、などにも伝染していること、噛まれた人が「脳死」つまり中枢神経系が冒されて死亡していることなどの諸点から「家畜伝染病」に従って一応狂犬病が最も妥当であると考えられる。

2

史乘に披見される最初の流行は津輕における享保二十年（一七三五）の例である。すなわち「平山日記」⁽³⁾同年の条に「当年諸国共、犬の病はやり斃犬多有之候」と記されているのがこれである。「諸国共」とあるからその流行は単にこの地方ばかりでなく全国的なものであったらしく、畿内、⁽⁴⁾山陽、西海にも大流行が見

られた。

これより六年後の元文六年（一七四一）の正月から津軽地方は再び狂犬病の大流行が見られた。この時の流行は犬のみならず馬、狼などの諸動物間にも流行し、患犬によって噛まれ死亡する人が少くなかったことが次の記録によって窺われる。

正月より犬に病は候而、大絶候程死ニ候。方々に犬に喰われ死候人も有、其外馬並狼、狼等も病と見え多く所々に而死

（永禄日記、平山日記）

宝歴六年（一七五六）には大流行とまでは至らなかったが「病犬」を手取りにしたため、「熱毒」を煩って死亡した人がいる。

平沢定右衛門様 高倉五兵衛此者日頃 勇力之处、病犬を手取に致、熱毒に当病死

（永禄日記）

次いで宝歴十一年（一七六一）には下北地方にも及んで狼の間に拡がり、患狼に咬まれて「脳死」したという。

田名部市中狼狂廻り、此ノ為ニ人脳死

（原始謾筆風土年表）

これ以降青森にはしばらく流行はなかったらしく文献に見えないが、約五〇年後の文化四年（一八〇七）に同じく下北地方で多数の犬が死亡したという。「原始謾筆風土年表」同年の条に「狗多く落たりしか。此病狗に噛れたるに付馬糞摺りつけ本に復せり。狗は胎中三箇月」と記載されている。咬傷に馬糞を摺り付けたのは当時の俗信であらう。

文政元年（一八一八）北海道の江差において野犬が暴れて人に害を与えたため、野犬狩りを行って四百匹程を捕えたという。同

じく「原始謾筆風土年表」に「七月江指（差の誤り―筆者）にて狗犬の人を害する事三人に及びか、市中山野四百足を狩殺」とある。この記載のみで犬に狂犬病が蔓延していたとは断言出来ないが、その可能性は十分にある。

幕末も文久年間に入るや北海道や津軽に広く流行した。すなわち文久二年（一八六二）には「六月頃より犬病流行し而、青森、黒石等ニ而、犬數十匹斃死候よし」とあって津軽一丹に伝搬し、また函館においては文久元年（一八六一）五月以降犬疫が流行したが、翌年に至っても終熄せず、正月から八月まで渡島郡の福島村近辺で流行したようである。

3

わが国最初の狂犬病の専門書であるとされる「狂犬咬傷治方」が野呂元丈によって元文元年（一七三六）著わされた。この前年の享保二十年に狂犬病が全国的に猖獗を極めたことは、本書上梓の誘因の一つであったと推察される。享保二十年の流行は畿内や関東において見られたばかりでなく、すでにみちのくの津軽にまで伝搬されていたことは注目すべきである。しかしこれが直ちに蝦夷地に伝わったとは考えられない。当時津軽海峡を挟んで津軽と蝦夷地つまり北海道との間にはかなり頻繁な交通が見られたが、狂犬病の伝染は主として動物を介しての伝染であるため、人における痘瘡や麻疹や流感の如き伝染はしなかったと思われる。

狂犬病流行の要因として野犬が挙げられる。野犬は往時想像以上にとらしく、津軽では文化年間、蝦夷地派遣軍の防寒具として犬の毛皮が推奨され、短期間に約八〇〇頭の犬を狩って藩士に供したという。

明治二八年(一八九五)、長崎で最初のバスターール法による予防注射が人に対して施行され、次いで同三〇年(一八九七)、獣疫予防法が実施され、患畜の届出、隔離、野犬捕獲、消毒法が規定され、大正八年(一九一九)からは日本法により犬の予防注射が実施されて防疫体制はほぼ整った。

⁽¹²⁾ 明治三十年からの全国統計を見ると、やはり犬の狂犬病が圧倒的に多く、最多発生は大正十三年(一九二四)の三二〇五頭で、人では二三五名の発生を数えた。現在では防疫体制がほぼ完璧であり、昭和三二年(一九五七)以来一件の発生も見ていない。

文 献

- (1) 藤井尚久 明治前本邦疾病史 明治前日本医学史第一巻所収、日本学術振興会、一九五五年
- (2) 越智勇一監修 家畜伝染病 南江堂 昭和四四年
- (3) みちのく双書 第二十二集 青森県文化財保護協会 昭和四二年
- (4) 小鹿島 果編 日本災異志 地人書館、昭和四二年
- (5) みちのく双書 第一集 青森県文化財保護協会、昭和三年
- (6) みちのく双書 第九・十集 青森県文化財保護協会 昭和三五・六年
- (7) 外川曲東 広般日記 弘前市立図書館蔵
- (8) 河野常吉編 函館区史 函館区役所 明治四十四年
- (9) 福島村 福嶋村史「維新前北海道震災年表」蝦夷往来双書第一編より引用
- (10) 烏谷良吉 津軽海峡の史的研究 晴南社、昭和十九年

(11) 津軽歴代記類 みちのく双書 第八集 青森県文化財保護協会 昭和三十四年

Summary

The author aimed to describe a short history of rabies epidemics in Hokkaido and Aomori before Meiji era. The flourishing of the disease was observed among wild dogs in 1735 for the first time at Aomori and thereafter four times of flourishings were observed in this area.

At Esashi of Hokkaido about 400 wild dogs were hunted and killed in 1818 as people were suffered from many mad dogs, which would imply us the first transmission of rabies to Hokkaido from Aomori.

From 1861 to 1862, the wide prevalences were seen among dogs both in Aomori and Hokkaido.

日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかづ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学を代表して内外関係學術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費として年額一五〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条 本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学教授室内

(東京都文京区本郷二の一)に置く。

第九条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条 会則の変更は総会の承認を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回(一月、四月、七月、十月)末日とする。

締切は発行月の二か月前とする。

投融資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに英文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに英文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数

表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で三印刷ページ(四百字原稿用紙で大体七枚)までは無料とし、それを越えた分は一印刷ページあたり一五〇〇円を著者の負担とする。

校正

原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別刷

投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先

東京都文京区本郷二丁目一の一
順天堂大学医学部医史学教授室内 日本医史学会

編集委員

大島蘭三郎(委員長) 石原 明 杉田暉道
大塚恭男 酒井シヅ

日本医史学会役員氏名 (五十音順)

理事長 小川 鼎三
 会長 鈴木 宜民
 常任理事 石原 明 大島蘭三郎

理事

赤松 金芳 阿知波五郎 今田 見信
 石川 光昭 内山 孝一 大久保利謙
 大塚 敬節 大矢 全節 緒方 富雄
 岡西 為人 蒲原 宏 佐藤 美実
 杉 靖三郎 鈴木 正夫 鈴木 勝
 宗田 一 竹内 薫兵 津崎 孝道
 戸苅近太郎 中野 操 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系

幹事

大塚 恭男 酒井 シヅ 杉田 暉道
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名 (五十音順)

安芸 基雄 石田 憲吾 今市 正義
 岩治 勇一 王丸 勇 大塚 恭男
 金城清松 久志本常孝 榊原修紀田郎
 清水藤太郎 杉田 暉道 鈴木 宜民
 高木圭二郎 高山 担三 田中 助一
 津田 進三 中泉 行正 中沢 修
 中山 沃 長門谷洋治 服部 敏良

福島 義一 藤野恒三郎 丸山 博
 松本 明知 三浦 豊彦 三廻 俊一
 森 優 谷津 三雄 山形 敬一
 山下 喜明 山田 平太 中山 牙彦

「日本医史学雑誌」の

バックナンバーについて

日本医史学雑誌五巻一号(復刊一号)―昭和二九年―から十五巻四号―昭和四四年―までのバックナンバー揃いを一万六千五百円一卷を千五百円、一号を四百円の会員価格で頒布しています。御希望の方は日本医史学会事務所宛に申込み下さい。

会員消息

小川理事長渡欧

小川鼎三理事長はアリタリヤ航空の招待で、四月十五日夜、羽田を発って渡欧され、イタリヤ、スイス、フランス、ドイツ、オーストリーの各地を廻られ、五月九日帰国される。その間、ローマ大学のパツチーニ名誉教授、チューリッヒ大学のアカークネヒト教授、ミュンヘン大学のゲルケ教授、ウィーン大学のレスキ教授、モンペリエ大学のデュリユー博士ら歐洲の有名な医史学者を訪ねられ、パリでの国際医

史学会常任理事会に出席されるなど多忙な日程が組まれているが、その詳細にわたっては、いずれ例会で御報告があることと思う。

中山沃氏岡山大学教授に就任

本学会評議員中山沃氏は福原武教授停年退職のあとを受けて、岡山大学医学部生理学第二講座の教授に就任された。

昭和四十五年五月二十五日 印刷
 昭和四十五年五月三十一日 発行

日本医史学雑誌

第十六巻 一号

編集者代表 大 島 蘭 三 郎
 発行者 日本医史学会
 印刷者 代表 小川 鼎三
 発行者 五協印刷有限公司
 日本医史学会

東京都文京区本郷二丁目
 順天堂大学医学部医史学
 教室内
 郵便番号 一一一三番
 振替 東京 一五二五〇番

Tomio OGATA : Gentaku Otsuki's Contributions to "Rangaku Kotohazime"	(65)
Ichiro YOSHIDA : On the History of "Seiki" Medicaments Spreading to the East.....	(66)
Masanori IMAICHI : A Study on the Documents of Dosan Manase during the Muromachi-Sengoku Era	(66)
Kaneyoshi AKAMATSU : A document of the Pharmaceutical Preparation in 1730....	(67)
Hajime SODA : Bibliographical Study on the Chemical Books by Komin Kawamoto	(68)
Junji KAWASHIMA : On the "Tosai Notes" (Shinjun Kawaguchi)	(68)
Yasuo TOYOKURA : "Innocent" Babinski's Tōe Phenomenon in Buddhist Images and Paintings.....	(69)
Ranzaburo ŌTORI : On the Tōu Komori's book "Ran-po Sūki".....	(69)
Kidō SUGITA : Medical Conception in the "Onshitsu-kyosyo".....	(70)
Akira ISHIHARA : On the Bronze Figure of Man and Medical Stone Text in China	(71)
Shizu SAKAI : On the Obstetric Books of Gentaku Ohotsuki.....	(72)
Hiroshi KAMBARA : On the Introduction of Plaster of Paris Technique into Japan	(72)
Akitomo MATSUKI : A short History of Rabies Epidemics in Hokkaido and Aomori before the Meiji Era	(73)

Members Presentations (Abstracts)

Yasuo OTSUKA : Study on the Chinese Medical Book "Chien Chin Yao Fang" (1)	(51)
Dōmei YAKAZU : An Inside History of Establishment of the Beri-beri Hospital by Western and Eastern Medicine in the Early Meiji Era.....	(51)
Teizo OGAWA : On the "Igaku-keimo" of Banri Hoashi	(52)
Toshio OTAKI : On the Beriberi and Measles lectured by Pompe van Meerdervoort	(53)
Sosogu NAKAYAMA and Sumiro ISHIDA : Jennerian Vaccination in Okayama District and Yoan Moriya.....	(53)
Morikuni SUGIMORI : Baelz and School Health in Japan	(54)
Sakae MIKI : <i>φύσις</i> and Yin-Yang.....	(55)
Shinzo TSUDA : A Short History on Hotei Fujii	(56)
Yukio SHIBATA : Nurse Education in the Meiji Era	(57)
Hiroshi KAMBARA : Recent Status of the International Hippocratic Foundation of Cos.....	(58)
Akira FURUKAWA : Octave Terrillon, pionnier de l'asepsie chirurgicale	(58)
Ichiro AOKI and Misao NAKANO : The Floor Plan of the NISHU-DO of Shindo Tsuboi	(59)
Hisashi SAKAI : Anatomical Models in the Clan of Kaga	(59)
Kazuo KATAGIRI : On the Anatomical Charts of an Eyeball in the "Ganka-shinsho"	(60)
Akitomo MATSUKI : Scurvy and "Ezochi-ishitsu-ko" written by Toki.....	(60)
Takuji MIWA : An Approach to the Historical Study of Organ Consciousness by Multilingual Comparison (2).....	(61)
Toyohiko MIURA : The Cooperative Society Hospital of Ikuno Mine founded in 1892	(61)
Misao NAKANO : On a Certain of the Aichi Prefectural Hospital	(62)
Zensetsu OHYA : A propos des ouvrages d'Kaguenot	(62)
Giiti HUKUSHIMA : An Epidemio-historical Study of the Family Hachisuka, feudal lord of the Awa Clan, seen from records on "Sasayu".....	(63)
Terutane YAMADA : "IPPONDO" on Psychopathy in the Edo Era	(64)
Goro ACHIWA : On the History of Medical Education.....	(64)

110,000 医家の週刊医学雑誌

最も親切なる臨牀医家の好伴侶

毎週土曜日発行

定価
B5判
三六ヶ月分

二百五
十三
六
〇〇
〇〇
円

送料
十八
円
共

週刊

日本医事新報

清新潑刺・充実無比

——新らしき医学の動向を知るために——

「学説」「学会印象記」「カラー・グラビア」「MEDICAL ESSAY」「時論」「ニュース」「学会案内」「学位授与」「一週一話」「私の考え方」「質疑応答」「閑窓夜話」「お茶水だより」「人」「医事案内」その他

——医家必読の有益記事全誌面に満載——

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 東京 (292)1551(大代表) 振替東京 25171番

日本医事新報社

朝夕一杯！ 中将湯が

貴方の健康をととのえます

婦人良薬

中将湯

150円・300円

頭痛・肩こり・冷え
生理痛・生理不順
めまい・産前産後
更年期障害に

17種の薬草を一錠に

中将湯の錠剤

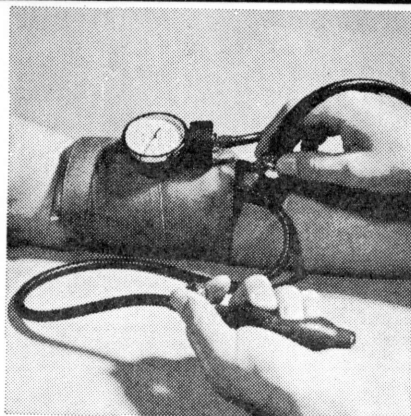
ツムール

200円・500円・1000円



株式会社 津村順天堂
東京都中央区日本橋通3～8

〈健保適用〉



随伴症状の改善が迅速です

★新しいレセルピリン系の血圧安定・降下剤

パラテンシオール[®]

〈塩酸レセルピリン酸ジメチルアミノエチル〉

●降圧作用は緩和です

過度に降下させることなく、動揺性の高血圧に対し安定化作用を示しま

●抑うつ症状を起こしません

高齢者・管理職・インテリ層に特に好適です

●忍容性は良好です

脳・腎・心・肝・内分泌系障害や糖尿・痛風のある時にも広く用いられま

●随伴症状の改善が迅速です

頭痛・頭重感・肩こり・息切れ・耳鳴・めまいなど高血圧に随伴する愁訴速やかに改善します

《用法》

作用が緩和ですので、降圧効果を比較的早く望まれる場合には、他の適当な降圧剤との併用で治療を開始します。一定の降圧効果が得られた後は、徐々に本剤の単独維持療法にきりかえれば、不快な副作用発生の心配なく好適な外来療法が可能です

《包装》糖衣錠(7.5mg):120錠(6錠×20) 600錠(6錠×100) 1500錠(6錠×250)

薬価基準—糖衣錠(7.5mg) 1錠当り25.60円



製造＝吉富製薬〈大阪市東区平野町3-35〉
販売＝武田薬品 提携＝Latéma社〈フランス〉

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 16. No. 1

April 1970

CONTENTS

² The 71st General Meeting of Japanese Society of Medical History

Spacial Lectures

Studies on Activities of Missionary

Foreign Physicians in Modern Japan

.....Yoji NAGATOYA...(1)

Impressions During the Translation

into Japanese of the SUSHRUTA-SAMHITA

from Its English Text.....Masao Suzuki...(45)

Lecture of the President

Historical Survey on the Visual Disturbances

Due to Diabetes Mellitus, in Particular

About the Effect of the Li Tong-yuan

Prescriptions for the Diabetic Retinopatley

.....Yoshitami SUZUKI...(49)

Members' Presentations(51)

The Japanese Society of Medical History

Department of Medical History

Juntendo University, School of Medicine

Hongo 2~1~1, Bunkyo-ku, Tokyo.

Sakat